ゲーマーと虹色の少女たち

一般紳士君

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

虹ヶ咲学園に通うゲーマーの一般男子高校生がスクールアイドル同好会と関わったり関わらなかったり、生徒会長にお説教されたりされなかったりするお話。

目次

第1話 …… 1
第1話（裏） …… 7
第2話 …… 11
第3話 …… 15
第4話 …… 21
第5話 …… 27
第6話 …… 32
番外編　優木せつ菜誕生日記念 …… 41
第7話 …… 48
第8話 …… 56
第9話 …… 65
第10話 …… 82

第1話

皆さんはこんな妄想をしたことがないだろうか。
路地裏で不良達に襲われている女の子を発見し、颯爽と駆けつけて不良達を倒す自分。それがきっかけでその女の子に一目惚れされ、なんやかんやあってその子と結ばれる話。
男なら誰でも一度は妄想したことがあるだろう。少なくとも俺はしたことがある。
所詮これはただの妄想でしかなくて、こんな状況に出会うことなどまずありえない。アニメや漫画ないだけの出来事だ。そう考えていた時期が俺にもありました……。

＊　＊　＊

ある日の学校帰りのこと。
今日は楽しみにしていたゲームの発売日だ。長寿作品である『オラゴンクエスト』待望の十二作目。ＳＮＳでも話題となり、日本だけでなく世界中の人々からも期待されている。
超がつくほどのゲーマーである俺としては何としても発売当日に購入し、ネタバレが俺の耳に入る前にクリアしたいものだ。
ルンルン気分でゲームショップに向かう俺だが、道中衝撃的な光景を目にしてしまった。
路地裏で女の子が二人組のがたいのいい男に襲われていた。
彼女の服は刃物か何かで切り裂かれていて、目からは涙がとめどなく溢れ、その表情は絶望の色に染まっている。
助けなければ。
普通の人ならそう考えるのだろう。けれど俺は違った。

二人組になんて敵いっこない。
知らない人だし。
俺以外の誰かが助けに行くだろう。
俺は逃げる言い訳ばかり考えていた。
自分でも最低だと思う。
けれど、勇気が出ないのだから仕方がない。スポーツも何もやってないただのゲーマーが倒せる相手じゃない。
そうやって何度も何度も言い訳しながらその場から立ち去ろうとした。

彼女と目が合ってしまった。
現れた希望に縋るかのような目だ。
彼女の口が僅かに動く。
た　す　け　て

俺は迷わず駆け出した。
何が勇気が出ないだ。何が倒せない相手だ。
俺がビビッてどうする。一番怖い思いをしているのは彼女なのに。
俺が逃げ出してどうする。一番逃げたいと思っているのは彼女なのに。
真っ向勝負で勝てないのなら不意打ちで倒せばいい。不意打ちの一撃で倒せば戦う必要はない。そして一撃で倒すなら狙うは急所。
「せいっ！」
こちらに背を向けている男一人の股間を後ろから蹴り上げる。彼女に夢中になっている男達は当然俺には気付かない。
「う゛っ！」
俺の貧弱な蹴りでも股間に当てれば強烈な一撃になる。これで一人片づけた。
「なっ！　てめぇ！」

一人は今のでダウンさせられた。だが、流石にもう一人の男に気付かれた。
想定内だ、問題ない。相手が冷静になる前に、相手が反撃してくる前に一撃で倒す。
「お前も食らえ！」
もう一人の男にも正面から股間に蹴りをお見舞いする。当然もう一人の男も当然ダウンする。
「卑怯とか言うなよ。お前らが悪いんだからな」
男達は片づけた。男達を拘束する前に自分の制服の上着とハンカチを投げ渡す。
「遅くなってごめんなさい」
男達のベルトを抜き取って、それで手をしっかりと縛る。
あっ、警察も呼ばなきゃだな。
「……あっ、もしもし警察ですか？　女の子を襲っている男がいたのでこうそくしたんですけど。……はい、場所は○○町の○○のコンビニの横の路地裏です。……はい、よろしくお願いします」
警察への連絡も終わって、彼女が渡した上着を着たのを横目で確認してから彼女の方を見る。
綺麗なピンク色の髪に、右側にお団子のようなものがついた髪型。そして、涙でくしゃくしゃになっていても一目で美少女だとわかる顔立ち。
「大丈夫でしたか？　怪我とかしてないですか？」
「はい……大丈夫……です」
「そうですか、よかったです。もう少ししたら警察が来てくれると思うので待っててください」
ひとまず彼女が無事でよかった。
とりあえず警察が来るまで待って、後のことは全部警察に任せよう。

＊　＊　＊

ここは虹ヶ咲学園。俺、村上友紀(むらかみゆうき)はこの学校の情報処理学科の２年生だ。
お台場にある学校で、その敷地は迷子になりそうなくらい広大だ。俺も入学したての頃はよく迷子になったものだ。
俺が通う情報処理学科をはじめとして、ライフデザイン学科、国際交流学科など非常に専攻が多い。学びの場としては最高の環境だ。
また、学校は部活動にも力を入れており、毎年いくつかの学校が全国大会に出場している。同好会も割と自由に作ることができ、その数は１００を超えるとか。俺はどこにも所属していないが、流しそうめん同好会なる謎の同好会も存在するらしい。最近はスクールアイドル同好会というところが頑張って活動しているらしい。
世間ではスクールアイドルが非常に流行っている。うちのように同好会として活動していたり、正式な部として活動していたり、部活動関係なしに活動していたり活動形態はいろいろあるようだが、たいていの学校にはスクールアイドルがいるらしい。

まぁ、俺には関係ないが。スクールアイドル好きを否定するわけではないが、スクールアイドルを追いかけてる暇があったらゲームをしている方が俺は好きだ。
家ではもちろんのこと、登下校中はスマホゲームに勤しんでいる。さすがに授業中にやることはないが。教科書を読むだけですべて理解できるような天才じゃないので授業は聞かないとマズイのですよ。
今日の登校はモンスターをストライクするゲームだ。ちょうどこの時間にゲリラクエストが出現しているのだ。前のゲリラクエストは警察の事情聴取でできなかったため、この時間にたくさん周回するぞ。むん！
「おはようございまーす！」
今日は校門がにぎやかだ。どうやら生徒会が挨拶運動をしているようだ。ご苦労様です。

「待ってください、村上さん」
あ～あ、かわいそうな村上さん。生徒会に名指しで呼び止められるなんて。今日は厄日だね。
「村上友紀さん、あなたのことですよ」
なんだ、俺のことかよ。今日は厄日だな。
仕方ないので一度立ち止まって、俺を呼び止めた彼女の方を見る。
「おはようございます、村上友紀さん」
三つ編みに眼鏡をかけた彼女は中川菜々。この学校の生徒会長だ。全生徒の名前を憶えているという噂がある。俺は事あるごとに彼女に突っかかられるのだが今日は何の用だろうか。
「おはよう、生徒会長。今日はいったい何の用で？」
「何の用？　考えればすぐにわかることだと思いますが？」
すぐにわかることと言われてもなぁ……。
「想像もつかない、といった顔ですね。……いいでしょう、教えてあげます。あなたが右手に持っているもの、それは何ですか？」
「スマホ」
「そう、スマホです。あなたは今歩きながらスマホを操作していましたね？　それも前を一切見ずに」
「何か問題でも？」
「問題大アリです！　歩きスマホはしてはいけませんと言ってるじゃないですか！　何度も何度もな～んども！　私が何回あなたに注意したと思ってるんですか！　先週も廊下で注意したばかりですよね！」
俺に対して怒りをあらわにする生徒会長。そんな大声は出さなくてもいいと思うんだ。びっくりしちゃったじゃん。周りの生徒も何事かとこっち見てるし。
にしても、先週そんなこと注意されたっけなぁ？　先週はあのことの印象が強すぎて他のことは何にも覚えてないんだよな。
「先週はいろいろあって忘れちゃった。めんごめんご」
「わ、すれ……た……？」
俺の返事を聞いた生徒会長が呆然と立ちすくむ。でも忘れちゃっ

たものは仕方ないと俺は思うんだ。人間誰だって何かを忘れることはあるだろ。それを乗り越えて人は大人になっていくんだ。偉い人がそんな感じのことを言ってた気がする。
「フフフ……わかりました。あなたの言いたいことはよ～～～くわかりました。私の言葉なんかよりゲームの方があなたはよっぽど大事なんですね」
　先週はゲームが原因で忘れたわけではないんだけど。生徒会長の言葉よりゲームの方が大事なのは事実だけど。
「わかってもらえたようで嬉しいよ。それじゃ、俺は教室行くんで。挨拶運動頑張ってね」
　生徒会長の前を通り過ぎようとするが、突然体が後ろに引っ張られる。どうやら生徒会長が俺のシャツの襟を掴んだようだ。
「誰が行ってもいいと言ったんですか？」
　やっべ、生徒会長激おこだよ。後ろに阿修羅が見えるもん。
「私は今まで大きな間違いを犯していました。あなたに数分のお説教を何回積み重ねたところで何の意味もなかったんです。あなたには一度にまとめてお説教をしたほうが効果があるんでしょう。……今日の放課後は空いてますね？　授業終了後すぐに生徒会室に来てください。そこでたっぷりとお説教してあげましょう。1時間でも2時間でも何時間でも。私の言葉があなたに届くまで。忘れた、などと二度と吐けなくなるまで」
「いや、あの、今日はあれがあれであれなんで……」
「何も用事が無い様でよかったです。では、また放課後にお会いしましょう。楽しみに待っていますので。もう行ってもいいですよ」
「はい……」
　どうしよう。あれがあれじゃ何も通じなかったよ。用事がないのは事実だけどさ。
　素直に行ったら絶対にボロ雑巾にされるよなぁ。……逃げちゃうか！

第1話（裏）

ある日の学校帰り、今日は侑ちゃんは学校に残ってやることがあるというので私一人で帰っていた。私は手伝うつもりだったけど、侑ちゃんに「一人で大丈夫だから歩夢は先に帰ってていいよ」って言われちゃった。

一人で家に帰るのはとても久しぶりだなぁ。いつもは隣にいる人が隣にいないととても寂しく感じる。日常のふとした瞬間に自分の中で侑ちゃんがとても大きな存在になっていることを実感する。

でも、明日は同好会の練習の日だ。侑ちゃんとも同好会のみんなとも一緒に練習できる。楽しみだなぁ。今日は明日に備えてしっかりと休まなきゃ。

それは突然のことだった。

誰かにいきなり腕を掴まれ、路地裏に連れ込まれてしまった。連れ込まれた先には男の人が2人いて、その内の1人がナイフで私の制服を切り裂き、私を奥のほうへ突き飛ばした。

あまりにも突然のことで私は何もすることができなかった。状況を理解すると下卑た笑いを浮かべる2人が目に入りとてつもない恐怖が私を襲った。

誰か助けて！

そう叫びたくても恐怖で声が出ない。逃げたくても足が動かない。少しでも抵抗をと思い切り裂かれてあらわになった胸元を腕で隠すも、簡単にはがされてしまう。

男達の後ろには町ゆく人達が見える。けれど、誰も私のことに気付いてくれない。みんなただ通り過ぎていくだけ。

私を助けてくれる人はいないんだ。嫌でもそう認識させられる。目から涙がこぼれた。

私はこれからどうなるのだろうか。
犯される？　こんな最低な男達に？
嫌だなぁ。そういうことは好きな人とだけしたかったなぁ。
そもそも、どうして私がこんな目に合わなくちゃいけないのだろうか。何も悪いことはしてないのに。ただ普通の生活をしていただけなのに。
考えれば考えるほど不条理なこの世界への怒りが湧いてくる。
男達の手が伸びてくる。
誰の助けも来ない。逃げようにも体が動かない。もうどうすることもできない。私はすでに諦めていた。

ごめんなさい、お母さん。

ごめんね、同好会のみんな。

ごめんね、侑ちゃん……。

ふと顔を上げると1人の男の人と目が合った。彼はこちらの状況に気付いている。けれど、助けに入ろうか迷っているように見える。彼はこのまま立ち去ってしまうかもしれない。そうなったら今度こそ私は終わりだ。
一縷の望みにかけ、震える唇をわずかに動かす。

た　す　け　て

そう声にならない言葉を発すると、彼は覚悟を決めた顔になり私の

元に駆け出してくれた。
私に夢中になっている1人の急所を後ろから蹴り上げて気絶させる。それに気付いたもう1人にも急所に正面からの蹴りをお見舞いさせて気絶させる。瞬殺だった。
「遅くなってごめんなさい」
彼は自分の上着とハンカチを渡してくれた。上着で胸元を隠し、ハンカチでぐちゃぐちゃになった顔を拭く。貸してもらった上着をよく見ると虹ヶ咲学園の制服だった。
「もしもし警察ですか？」
彼は男達をベルトで拘束して警察に連絡をしているようだった。
彼が電話をしている間、私を助けてくれた彼のことをじっくりと観察する。
すこしぼさぼさな黒髪。今は後ろを向いてるから顔は見えないけど、さっき見た感じではイケメンとはまではいかないけどそれなりに整った顔立ちだった。暗い中でもはっきりとわかるくらいの真っ赤な瞳だった。
身長は多分私と同じくらい。体つきも普通でスポーツなどをやっている感じには見えない。さっきまでの様子から喧嘩慣れしているようにも見えない。
どこにでもいる普通の人。そんな人が勇気を振り絞って私を助けに来てくれた。
嬉しい。彼がすごくかっこよく見える。多分これが吊り橋効果というものなのだろう。
「大丈夫でしたか？　怪我とかしてないですか？」
電話をし終えた彼が私の方を見る。彼が赤い双眸で私をとらえる。暗い中でその瞳で見つめられると少し怖くて顔を伏せてしまう。
「はい……大丈夫……です」
「そうですか、よかったです。もう少ししたら警察が来てくれると思うので待っててください」
そう言ったきり一言も発しない彼。
少しぶっきらぼうな彼。これが素なのか、それともあえてそう演じ

ているのか私にはわからないけれど、必要以上に干渉してこない彼の態度が今はありがたかった。

あの後、私は彼と一緒に警察に連れていかれて事情聴取を受けた。彼は私より先に解放されたようで、私が終わった時にはすでにおらず、お礼を言うことができなかった。上着も返せてないし。せめて名前だけでも聞いておけばよかったなぁ……。でも、同じ学校みたいだしきっとまた会えるよね。せつ菜ちゃんなら名前とか所属学科とかもわかるだろうし。

「歩夢っ!!」

「侑ちゃんっ!」

侑ちゃんが私を迎えに来てくれた。侑ちゃんとまたこうやって会えたことが嬉しくて思わず駆け出してしまう。

「ごめん、ごめんね!　私が歩夢を1人にしたから!」

侑ちゃんが泣きながら抱き着いてくる。少し苦しいけど、侑ちゃんが本当に私を大事に思ってくれているのが伝わってくる。

「侑ちゃん、私は大丈夫だから。あんまり自分を責めないで」

侑ちゃんの涙を指で拭う。

「歩夢……」

「心配してくれてありがとう。でも、私は大丈夫だからね。いつも通り接してくれたら嬉しいな」

「……うん、わかったよ歩夢」

「ありがとう、侑ちゃん。もう帰ろっか。私お腹がすいちゃった」

「そうだね。私も急いで来たからお腹ペコペコだよ～」

私達は手をつないで家に帰った。絶対にお互いの手を離さないようにしっかりと握って。

第2話

今日はいい天気だ。気持ち良すぎてうっかり寝ちゃいそうになるな。中庭の芝生に寝転がりながらそんなことを考える。

昼休み。食堂で昼飯を食べた後は普段は教室に戻ってゲームに勤しむのだが、今日はぽかぽか陽気に誘われて中庭まで来てしまった。たまにはこうやって過ごすのも悪くないかもしれない。

そういえば、そろそろあの情報が発表される時間か。大事なことを思い出した俺はスマホで『草原行動』の公式ページを開ける。草原行動は最近俺がプレイしているＦＰＳなのだが、そのゲームで近々行われる大型アップデートの情報が今日の昼に発表なのだ。今日はこれを楽しみにしながら学校に来たのだ。

アプデ情報のお知らせを見つけた俺は期待で胸を膨らませながらそのページを開ける。

新キャラ追加に新マップ追加、それに加えて車両に乗ってマップを移動できるようになるのか。なるほどなるほど。大型アプデというだけあってなかなかボリューミーな内容だ。これはアプデの日がますますが楽しみになるな。

ついでにバグの修正も行われるらしい。このゲーム、リリース当初から地面に向けて銃を撃つとアバターが宙に浮くというバグがあったのだが、とうとうそのバグが修正されるらしい。絵面が面白くて俺は好きだったのだが……そうか、お前消えるのか……。

「にゃーん」

「ん？　猫？」

ずっとスマホの画面に集中していて気付かなかったが、いつの間にか足元に白い猫がいた。起き上がって俺にすり寄る猫の背中を優しくなでる。

野良猫がうっかり迷い込んだのか。それともここに住み着いているのか。

「にゃーん」

お腹が空いているのか？　あいにく、今は何も持っていないんだ。我慢してくれ。
「見つけた、はんぺん」
後ろから声がしたのでそちらに振り返ると女の子がいた。
ピンク色の髪に頭頂部に目立つアホ毛。この前の女の子に負けず劣らずの美少女だ。身長がかなり小さくてなんだか小動物感がある
な。リボンの色的に1年生か。右手にはキャットフード、左手には餌入れを持っている。
彼女はこちらに向かって歩いてくる。猫も俺から離れて彼女に駆け寄る。
「はんぺんってこの猫の名前か？」
「そう。あなたは誰？」
「村上友紀。情報処理学科の2年。お前は？」
「天王寺璃奈。情報処理学科の1年」
「そうか。天王寺ははんぺんの飼い主なのか？」
「飼い主みたいなもの」
天王寺ははんぺんに餌をやりながら答える。飼い主みたいなものってなんやねん。
あれ？　そもそもこの学校って動物飼うのダメじゃなかったっけ？
「なぁ、勝手にはんぺんを飼ってて怒られないのか？」
「大丈夫。はんぺんはペットじゃなくて生徒会お散歩役員だから」
「お散歩役員……？」
なんじゃそりゃ。初めてそんな役職聞いたぞ。
「はんぺんは虹ヶ咲学園の一員。『飼うのは禁止だけど学校の一員として迎え入れることは校則違反ではない』って生徒会長が」
「へぇ……あの堅物生徒会長が、ねぇ……。」
「堅物……。友紀さんは生徒会長嫌いなの？」
「あんまり好きではないな。すぐ怒ってくるし、今朝も怒られたばっかだし」
「それって友紀さんが悪いんじゃないの？」

「失礼な。俺はただスマホでゲームをしながら登校してただけだ」
「それは友紀さんが悪い」
　天王寺に俺が悪いと断言されてしまった。もしかして間違ってるのは世界じゃなくて俺……？
「友紀さんはよくゲームするの？」
「四六時中してるよ」
「草原行動も？」
「してるけど、なんで俺がそれをしてるってわかったんだ？」
「そのスマホ、草原行動のページが開いてあったから」
　芝生に置いておいたスマホ、そういえば開きっぱだったな。
「よくこのページが草原行動のだってわかったな。タイトルもゲーム画像もどこにもないのに」
「私も見たから。草原行動のアップデート情報」
「天王寺もやるのか？」
「うん。私もゲーム好きだから」
「そうか。俺と同じだな。天王寺はもうオラゴンクエストやったか？」
「やった。おもしろかった」
「だよな！　特に――――」

『キーンコーン』
「おっと、もうこんな時間か」
　予鈴が鳴るまで天王寺と話し込んでしまった。はんぺんもいつの間にかどこかに行ってしまった。
「楽しかったよ。誰かとこんなにゲームの話で盛り上がったのは初めてだ」
「私も楽しかった」
「そりゃよかった」
　天王寺は楽しそうというが表情は楽しそうに見えない。多分天王寺は感情を顔に出すのが苦手なのだろう。
「それじゃあな。お互い授業に遅れないようにな」

「あの！」
「うん？　なんだ？」
「また……ううん、やっぱりなんでもない」
　なんでもない、か。そんな風には見えないが。言おうとしてたことはなんとなくわかる。俺も同じこと考えてたし。けど、多分天王寺はそれを言う勇気が出ないのだろう。
「そうか。……そうだ、またこうやって天王寺と話したいんだけど」
「っ！　私も、また話したい」
「よかった。じゃあ明日の昼休みにまたここで会おうか」
「うん。絶対に来る。約束」
「ああ、約束だ。それじゃあ、また明日な」
「うん。また明日」
　今度こそ天王寺と別れる。
　多分さっきのでよかったのだろう。天王寺の声も嬉しそうだったし。相変わらず顔には出ていなかったが。
　中学に天王寺と似たやつがいた。感情を出すのが苦手で、言いたいことがあるのにそれを言う勇気が出ない。中学のときの俺はそいつに何もしてやれなかった。関わることを避けていた。結局そいつは中学の３年間ずっと一人だった。
　俺はそのことを今でも後悔している。だから俺は天王寺の力になってあげたい。俺にできることならなんだってしてやる。さすがに天王寺にそれを直接言うのは恥ずかしすぎて言えないけどな。
　明日は何の話をしようか。天王寺はどんな話をしてくれるのだろうか。明日が楽しみで仕方がない。

第3話

放課後。

忌々しい生徒会長との約束の時間だ。まぁ、勝手に決められた約束なので当然行く気はないが。行ったところでどうせ怒られるだけだしな。とっとと逃げるに限る。

授業の合間にいくつも逃げる手段を考えたが、結局普段通りに帰るのが一番だという結論に至った。下手に動けばかえって目立ってしまう。目立つ行動をすれば生徒の多いこの学校だとすぐに噂になり、噂を聞き付けた生徒会長が俺を捕まえに来るだろう。

いつも通りのんびり帰り支度をする。あの生徒会長のことだ。俺が変な動きをしなければ生徒会室で俺のことを待ち続けるだろう。焦る必要はない。

「失礼しまーす。村上友紀君ってここにいますか？」

黒髪ツインテールの女の子が教室に入ってきた。リボンの色からして同じ2年生だな。

俺を探しているようだが、まさか生徒会の使いか？　でも生徒会であんな子見たことないぞ。わざわざ生徒会と無関係の人間を差し向けて俺を騙すなんて手の込んだこと、あの生徒会長がするか？　いや、あいつなら絶対自分自身で俺を捕まえに来るはずだ。彼女は多分別件で俺を探しに来たのだろう。それなら彼女から逃げる必要はないな。

「村上友紀は俺だけど」

そう答えると、彼女は微笑みを浮かべながら近寄ってくる。

「そっかそっか～。君が村上友紀君か～」

「何か用か？」

「ふふっ」

何か良いことでもあったのか彼女はずっと微笑みを浮かべている。心なしかいたずらを思いついた子供のようにも見える。

なんか嫌な予感がするな。早くこの場を立ち去ったほうがいいか。

だが、俺が逃げるより早く彼女は俺の手を掴んだ。

「えっと……この手は……？」
「ふふっ、村上君確保～」
「は？」
　は？
「それじゃあ行こっか」
「どこにだよ」
「せ・い・と・か・い・し・つ♪」
　満面の笑みで彼女は答える。可愛い。けど見惚れてる場合じゃないんだよなぁ……。

「なぁ、手離してほしいんだけど」
「ダメ。離したら逃げちゃうでしょ」
「ちっ、バレてるか」
　結局誰かもわからない彼女に生徒会室まで連行されている。手は放してくれないし、かといって乱暴に振り払うわけにもいかないし。おまけに周りから注目を浴びてるし、特に男子からは恨みが籠った目で見られるし。
　こんな可愛い子と手をつなげて羨ましいだろ、という意を込めてニヤリと笑うと殺意の籠った目で睨まれる。君たちにとっては羨ましいことなのかもしれないけどね、俺にとっては処刑台に連行される死刑囚の気分なんだよ。何も嬉しくないんだよ。君たちに俺の気持ちがわかるかい？わからないよなぁ。
「今更だけどお前は誰なんだ？　生徒会の人間じゃないだろ」
「私？　私は高咲侑、普通科の２年！　お察しの通り生徒会には入ってないよ」
「だろうな。で、生徒会とは無関係の高咲が俺を捕まえに来る理由は？」
「頼まれたからかな。菜々ちゃんとは友達だから。私が選ばれた理由は……う～ん、よくわかんない。とにかく生徒会室に連れてきてほしいって言われて」
「さいですか」

わざわざ生徒会以外の人間に頼んだ理由は俺の警戒心を解くためか。高咲と生徒会長がどんな関係かは知らないが、人選としては間違っていないと思う。人畜無害そうな高咲に騙された。そこまで考えて高咲を選んだのかはわからないが。

だが、高咲が俺を捕まえに来たのは授業終了からそこそこ時間が経ってからだった。俺がすぐに逃げていた場合高咲が来ても教室に俺はいなかったはずだ。それにもかかわらず高咲がのんびり捕まえに来たということは、つまり俺のいつも通り作戦がすべて読まれていたということになる。

俺の考えがすべて見透かされてるみたいでなんか腹立つ。

「で、村上君はなんで生徒会に呼ばれてるの？」

「今朝生徒会長に怒られて、そのことでお説教するから来いって生徒会長が」

「お説教？　村上君何かしたの？」

「ただゲームしながら登校してただけなんだけどなぁ」

「もしかしてずっとスマホの画面を見ながら歩いてたの？」

「そうだけどなにか？」

「『なにか？』じゃないよ。危ないよ」

「そうか？　人が来ても足音で気付くし、車とか自転車ならなおさら気付いて避けられるだろ。今まで何回も気付いて避けてるし」

「今までは大丈夫でもこれからも大丈夫って保証はないじゃん。それに、もし車に気付かずに事故になったらどうするの？　もしかしたら手が動かなくなって二度とゲームできない体になるかも」

「う～ん……それは困るなぁ」

俺の生きがいだし。ゲームがない生活なんて想像もできない。ゲームがない生活を送るくらいならいっそ死んだほうがマシだ。

「でしょ？　だからもう歩きスマホはやめなよ」

「……そうだな。ゲームができなくなるのは困るし、仕方ない。やめるか、歩きスマホ」

生徒会長に言われたときは何も思わなかったが、高咲に言われるとやめるかとすっと思えるのは何故だろうか。生徒会長ほど高圧的

じゃないからか？　それともゲームができなくなると脅されたから？　多分後者だな。
「よかったよかった。これで安心だね」
「ああ。というわけで、もう帰ってもいい？」
「ダ～メ」
　そんな～。

　そんなこんなでとうとう生徒会室まで辿り着いてしまった。この扉の先には閻魔大王が待ち受けている。俺を裁く準備は万全に整えているはずだ。俺が落ちる先は灼熱地獄か、それとも他の地獄か。やべぇ、灼熱地獄以外なんも思い出せないわ。
「アハハ、村上君怖がりすぎ。私から村上君は改心したから軽めにしてあげてって言ってあげるから。菜々ちゃんも鬼じゃないし、きっと軽めにしてくれるよ」
「そうだな。鬼じゃなくて閻魔大王だもんな」
「……それ、絶対本人に言っちゃだめだよ……」
『コンコン』
「どうぞ」
「失礼します」
　ちょい待ちちょい待ち、まだ俺覚悟決めてないんですけど！
「高咲さん。……と、村上さん」
「よう……。5年振りだな……」
「私は巨人ではありませんし、壁を壊した記憶もありませんが……。まぁ、そうですね。あえて言うなら8時間振りですね。逃げずに来ていただけたようで」
　逃げなかったんじゃねぇ。逃げられなかったんだよ。
「……逃げなかった、というよりは逃げられなかった、の方が正しい気もしますが」
　生徒会長は俺たちの手元を見ながら言う。高咲はいつまで手を握ってるんですかね。
「ああ、おかげさまでな。卑怯な手を使いやがって」

「村上さんなら高咲さんを無下にしないと思ったので。私の読み通りでしたね」
　そう言った彼女はニヤリと笑う。
「あの、菜々ちゃん。村上君は私の説得で改心したから。だから怒るなら軽めにしてあげてほしい」
「なるほど、改心した、と。それは本当ですか？」
「ああ、本当だ。高咲に誓って嘘じゃない」
「えっ？　私？」
「そこは神に誓うのが普通では……？　……さてはあなたかなり余裕がありますね？」
　いや、むしろ逆です。余裕がないからボケ続けるんです。
「……まぁ、高咲さんが言うからには本当なのでしょう」
　高咲のおかげで信じてもらえた。ありがとう高咲。お前が人徳のある人間でよかったよ。あとそろそろ手離して。
「それにしても、高咲さんの説得で改心ですか。私のプラン通りですね」
「プラン通りだと？」
「何の事情も知らない高咲さんなら自然に説得できるだろうと思いまして。それに、高咲さんならここに来るまでに村上さんのから事情を聴いて説得するだろうとも思ったので高咲さんをあなたの元へ向かわせました。これがプランＡです」
　全部高咲任せのガバガバなプランじゃねぇか。
「ちなみにプランＢは？」
「私の本気のお説教です」
　一番怖いプランじゃん。
「プランＣは？」
「このままだと事故で二度とゲームができない体になりますよ、と軽く脅すつもりでした。あなたにはこれが一番効果的かもしれないと思いまして」
　高咲が使ったプランか。ちなみにめっちゃ効きました。
「ですが、いくら村上さん自身のためとはいえ脅すというのは気が引

けたのでこのプランはあまり使いたくありませんでした。使わずに済んでよかったです」
俺の隣に素でプランCを実行したお方がいますが？
「高咲さんの優しい説得でよかったですね」
何を見て優しい説得って言ったんですか？
「で、改心したってことで帰っていいか？」
「いえ、まだダメです。改心したのは非常に良いことですが、今までの分の罰を村上さんに与えなければなりません」
「罰？　お前の靴でも舐めればいいか？　それともお前の椅子になればいいか？」
「私をなんだと思ってるんですか!!　……ゴホン。高咲さん、あなたはスクールアイドル同好会所属でしたね？」
「そうだよ」
「人員は足りていますか？」
えっ？　まさか俺にスクールアイドル同好会の手伝いをしろと？
「人員なら足りてｒ……あ」
あ、ってなんだよ。今絶対足りてるって言おうとしたよな。
断れ！　断ってくれ！　お前も俺なんかが同好会に入るの嫌だろ！　頼む高咲！　３００円あげるから！
「人員は足りてないなぁ～。ＰＶの撮影に練習メニューの作成でしょ？　あとはライブ会場の設営もあるし、他にも仕事がた～くさん！　私１人じゃ全然足りないんだよ～」
高咲ーッ！
「決まりですね。村上友紀さん、あなたにはスクールアイドル同好会の手伝いを命じます」

第４話

「あなたにはスクールアイドル同好会の手伝いを命じます」
「お断りします」
「あなたに拒否権はありません。この命令は絶対です」
　いや、拒否権くらいあるだろ。横暴すぎる。
「そもそも、生徒を強制的に部活に加入させる権限なんて生徒会長にないはずだ。……多分」
「そこは自信がないんだね……」
「だって生徒会長の持つ権限なんて知らないし。……で、どうなんだ？」
「ええ、もちろんそんな権限はありませんよ。ですが問題はありません。あくまでもボランティア活動の一環として手伝うだけですから」
　はたして強制的にやらされるボランティアはボランティアといえるのだろうか。
「あなたは高咲さんに恩義を感じていますよね？　それならばそれを高咲さんに返すべきですよね？」
「それはそうだが……」
「高咲さんも男手は欲しいですよね？」
「うん。あーあ、どこかに手伝ってくれる男の人はいないかなー」
「演技が棒だぞ」
「うっ……」
「……高咲さんの演技が棒だったのはさておき、人手が足りていないのは事実です」
　演技が棒すぎて嘘なんじゃないかとも思えるが、高咲が嘘をつくような人間とは思えないんだよな。
「質問いいか。期限はどれくらいだ？」
「私がいいと言うまでです。村上さんがきちんと仕事をするようであれば短くなりますし、全く仕事をしないのであれば卒業まで辞められないかもしれないし、同好会の手伝い以外の罰を与えるかもしれません」

「ちゃんとしてるかどうかの判断はお前が見に来てするのか？」
「いえ、私はいろいろあって同好会を見に行けないので高咲さんからの定期報告で判断します」
「いろいろってなんだよ」
「そ、それは……」
　急に口ごもる生徒会長。何か隠し事があるのか？　もしかしたら生徒会長の弱みを握れるかも。
「今は菜々ちゃんのことは置いといて、それよりも村上君のことだよ」
「……それもそうだな。もう１つ質問だ。休日出勤はあるのか？」
「同好会の活動自体は休日もやってるよ」
「そうですね。ですが、それに来るかどうかの判断は村上さんに任せます。あまりに来ないようであればきちんと仕事をやっていないと判断するかもしれませんが」
「なるほど……。……いいだろう、やってやる。死ぬ気で仕事しまくって速攻で終わらせてやる！」
　目標は１ヶ月。『ＦＦ１５』の発売日までに解放されてやる。面倒ごとをとっとと終わらせてじっくりＦＦをプレイするんだ。
「ふふっ、どうやらこの話受けていただけるようですね」
「ああ。そもそも、お前が拒否権はないって言ったんだろ。俺に受ける以外の選択肢はないんだよ」
「その通りです。ですが、村上さんのやる気があるのとないのとでは大きな差がありますからね」
「決まりだね。スクールアイドル同好会にようこそ！」
「しばらくの間よろしく頼む」
　高咲から差し出された手を握る。さっきまでずっと手を掴まれてたのに今更握手するのはなんだか変な感じがするな。
「それじゃ、早速部室に行こうか」
「あ、今日はバイトなんで無理」
「死ぬ気で仕事しまくるって話は!?」
「生活に関わることなんで勘弁して」
「生活が厳しいんですか？」

「そこまで厳しくはないけど、俺1人で稼がなきゃいけないから」
「1人で……？　その、村上さんのご両親は……？」
「ん？　……ああ、親は普通に生きてるよ。俺が一人暮らししてるだけ」
　一応仕送りはあるけど、ゲーム代とかを考えるとそれだけじゃ足りないんだよな。だから自分で稼ぐ必要があったんですね。
「実家からだとこの学校に通えないから一人暮らししてるんだよ」
「でも、村上さんは確か寮生ではありませんでしたよね？」
「ああ」
「え？　そうなの？　普通に寮に住めばよかったじゃん」
「寮だとあんまりゲーム持ち込めなさそうだし」
「あ～」
　あと、単純に寮はいろいろとめんどくさそう。
「ところで、村上君家にはどれくらいゲームあるの？」
「数えたことないなぁ。正確な数はわからないけど、多分１００くらいだと思う」
　実家から持ってこれなかったのも結構あるから、それを含めれば倍以上あると思うけど。
「１００！　すごーい！　今度村上君家遊びに行ってもいい!?」
「いいよ。今週末とかどう？」
「行く！」
「オーケー。じゃあ同好会の活動終わってからな」
「うん！　楽しみ～」
　図らずも高咲も遊ぶ約束ができた。しかも俺の自宅で。これはもしかすると自宅デートでは???　いや、違うか（冷静）
「んんっ。……村上さん、バイトはいいんですか？」
「おっと、完全に忘れてた。ありがとな。じゃあもう行くわ。また明日」
「うん、また明日！」
「ええ、また明日。スマホを触りながら帰ってはいけませんよ」
「大丈夫、もうしないから」

「あと、廊下を走ることもダメですよ」
「気を付けまーす」
２人に見送られて生徒会室を後にする。この後のバイトもがんばるぞい。

＊　＊　＊

「お疲れ様でしたー。先に上がりまーす」
ふぅ。今日のバイトも終わり。疲れたー。今日も一日頑張れてえらい。
にしても、今日はいつにも増して疲れたな。何故かいつもより客が多かったからか。なんであんなに多かったんですかねぇ……。
今日は帰ってから料理するのめんどくさいしカップ麺で済まそうかな。でも、昨日一昨日も朝昼晩とカップ麺だったしなぁ。あんまりカップ麺ばかり食べてると体壊すし。どうすっかなぁ。
「お疲れ様でした～」
「あ、近江先輩。お疲れ様です」
「友紀君、お疲れ～」
休憩室に入ってきたのは近江彼方先輩。アルバイト仲間にして、虹ヶ咲学園ライフデザイン学科の３年生。ちなみにすごく可愛い。おっとり系で、すごく優しい。生徒会長の１００倍優しい。ぶっちゃけタイプです。
近江先輩は家計を助けるために週５でアルバイトをやっており、家に帰ってからは家事、さらには奨学金のために勉強もしているらしい。それだけでも大変なはずなのに学校では部活動をやっているようだ。心の底から尊敬できる先輩だ。
ただ、あまりにも頑張りすぎて倒れたりしないかすごく心配だ。こんな多忙な生活をしていたらまともに休む時間なんかないだろうし、実際いつも眠たそうにしている。本格的に体調を崩す前に近江先輩

が休める時間があればいいのだが……。
「友紀君ももう帰り？」
「そうです。一緒に帰りますか？」
「うん、一緒に帰ろっか。支度するからちょっと待っててね～」
「じゃあ外で待ってますね」

「お待たせ～。それじゃあ帰ろっか」
「ええ、帰りましょうか」
　近江先輩と家が隣同士というわけではないので途中で別れることになるのだが、バイト終わりにはいつも一緒に帰っている。最初は近江先輩から一緒に帰ろうと提案してきたのだが、それ以降も度々誘ってきて、いつの間にかいつも一緒に帰るような関係になっていた。
「おやおや～？　友紀君、珍しくゲームしてないんだね～。充電切れたの？」
「そういうわけじゃないんですけど、今朝生徒会長に歩きスマホを注意されまして……。で、初対面の人にもやめたほうがいいと言われたので、これからは歩きスマホはやめようと誓ったんですよ」
「おぉ～。友紀君えら～い」
　近江先輩に優しく頭を撫でられる。恥ずかしい。
「あの、俺もう子供じゃないんで……」
「彼方ちゃんから見たらまだまだ子供だよ～。ほらほら、遠慮しないで」
　近江先輩は撫でる手を止めない。恥ずかしい。でも好みの先輩に撫でられて嬉しい。俺の本能は素直だ。
「友紀君が心配だから一緒に帰ってたけど、もうその必要はなくなっちゃったな～」
「えっ」
　それって、これからは俺と一緒に帰らないってことですか？　そんな……近江先輩と一緒に帰る時間は俺にとってゲームの次に幸せな時間だったのに……。
「じゃあね友紀君。また木曜日にね」

「はい……また、木曜日に……」
ショックを受けている間に分かれる地点まで来ていたようだ。近江先輩は何事もなかったかのように俺と別れる。あの人にとって俺はただの後輩ってことか……。はぁ……。

第5話

「あっ、友紀さん」
　のんびり昼飯を食べていたつもりはないのだが、俺が中庭に来た時にはすでに天王寺は来ていた。優しい顔ではんぺんがエサを食べているのを眺めていた。
「ごめん、待たせたか？」
「ううん、今来たところ」
　はんぺんのエサも残り少なく、明らかにかなり前に来ていたことがわかる。だが、天王寺が今来たと言うならその優しさに甘えよう。
「今日はこれを持ってきたから友紀さんに遊んでほしい」
　そう言って天王寺は自分のカバンからタブレットとコントローラーを取り出した。髪と同じピンク色のコントローラーはやけに天王寺に似合っている。
「私が昔作ったゲーム。ゲーム好きの友紀さんにも遊んでほしくて」
「天王寺が作ったゲームか。すごいな。1人で作ったのか？」
「うん。半年くらいかかった」
　半年もか。超大作じゃないか。
　天王寺からタブレットとコントローラーを受け取る。タイトル画面もすごく凝っている。
「『ファイアーダース2』か。1も作ったのか？」
「うん。でも、こっちの方が自信があったから」
「天王寺の自信作か。それは楽しみだな」
　スタートを選択し早速ゲームを開始する。
　ゲーム画面になると銃が映し出された。なるほど、シューティングゲームか。自分のアバターは手の部分しか見えないから一人称だな。ボタンをいろいろと押すと前転したりジャンプしたり横に跳んだりとなかなか本格的な動きをする。
「一人称のアクションシューティングか。渋いな」
「友紀さんならそこに注目してくれると思ってた」
「ゲーセンだと一人称のは結構あるけど、家庭用のゲームだとあんま

り見ないよな」
「だからあえて挑戦してみた」
　ステージも壁のひびや床の石ころなど細部までよく作られている。音楽は多分フリーのものを使っているのだと思うが、ステージの雰囲気には合っている。
　ステージを少し進むと最初の敵が出てきた。銃を構えた軍服のキャラだ。戦争中という設定だろうか。割とよくある設定だが、それが逆に良い。
「敵は強めに作ったから気を付けて」
「任せろ。ノーコンティニューでクリアしてやるよ」
「頑張って」
　様子見にと1発撃つがあっさりと避けられる。ふむ、よくできている。確かにこれは手強そうだ。
　敵の体力を一気に削ろうと連射するが、当然のように避けて距離を詰められる。それに合わせてこちらも再度照準を合わせるが、それも避けられ距離を詰められる。それを何度か繰り返しているうちに目前まで敵が迫り、手から銃を捨て懐から取り出したナイフで刺し殺されてしまう。
「あのあの、1発すら当たらずに負けたんですけど」
　画面に表示される『ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ』の文字を見ながらどうやって勝つかを考える。……いや、無理じゃね？　敵の体力がどれだけあるかはわからないが、銃が2つあればとにかくばら撒きまくっても削り切れるかもしれないが、1つだとばら撒くと火力が足りなくなるだろう。
「敵の体力は1に設定してある。だから1発でも当たれば倒せる」
「なるほど、ばら撒き作戦が正解なのか」
　それさえわかってしまえば怖くない。逃げ道がなるべくなくなるように銃弾をばら撒くだけだ。
　リスタートを選択し再び敵が出てくる箇所まで移動する。
　今回は作戦通り銃弾をばら撒く。敵の逃げ道がなくなるように考えながら撃つ。しかし、それでも敵は弾幕が僅かに薄いところに潜り

込んで避け続ける。なんてＡＩだ。だが、さすがに距離を詰める余裕はないようだ。このまま攻め続ける。
　撃ち続けるが敵もギリギリのところで避け続け、先にこちらの弾が尽きてしまった。敵はこの機を逃さず、俺がリロードをしている隙に一気に距離を詰め、手から銃を捨ててナイフを取り出す。さっきまで手に持ってた銃はおもちゃか？
「その動きはさっき見た」
　振るわれるナイフを後ろに跳んで躱し、リロードが完了した銃を再度構える。だが、敵は右へ転がって射線から逃れる。再び銃口を敵に向けるも、それよりも先に懐から拳銃を取り出して俺を撃ち抜く。
　再び表示される『ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ』の文字。
「ふぅぅぅぅぅぅ」
「どうしたの？　もうギブアップ？」
「いや、ギブじゃない。ギブじゃないんだけどさ……敵、強すぎない？」
　なんやねんあの動き。あの状況から横に回避する選択肢があるＡＩマジでどうなってんの？　というか、いくつ武器隠し持ってんだよ。銃なら最初持ってるやつでいいだろ。なんで毎回捨てるんだよ。なんで毎回ナイフで攻撃してくるんだよ。距離を詰める暇があったら遠距離から撃ち殺せるだろ。
「よくこんな強いＡＩ見つけられたな。まるで歯が立たん」
「探してない。一から自分で作った」
「これも天王寺が作ったのか!?」
「うん。すごく大変だった」
　マジで？　この子技術力ありすぎじゃない？　うちのクラスにもＡＩ作れるやつなんていないぞ。本当に１年か？　実は学校２週目だったりしない？
　これはなにがなんでもクリアするしかない。このままだと元から少ない先輩としての威厳が完全になくなってしまう気がする。
『キーンコーン』

「友紀さん、どうだった？」
「参りました」
　なんとか最初の敵を倒すことはできたが、予鈴が鳴るまでにクリアすることはできなかった。俺の完敗だ。
「面白かった？」
「ああ、すごく面白かったぞ。敵を倒すために作戦とか立ち回りとか結構しっかり考えなきゃいけないのが面白かった。俺はもともと作戦とか立ち回りとかそういうのを考えるの好きだからな。同じタイプの人にはこのゲームオススメかもしれないな。あ、でも難易度の高さに心が折れない人以外にはあまりオススメできないかも」
　俺は最終的に心が折れました。苦労して最初の敵を倒したのに、その先に同じ敵が3体同時に出てくるんだもん。当然ナイフでめった刺しにされました。あんなん勝てへんで。
「ほんと？」
「ああ」
「嬉しい。ありがとう。友紀さんに遊んでもらってよかった」
　天王寺の声が弾んでいる。相当嬉しいのだろう。その気持ち俺もわかる気がする。俺も小学生の時に頑張って作った工作を先生とか友達に褒めてもらえて嬉しかった記憶がある。苦労して作ったものを誰かに褒めてもらえると自分の成果が認められたように感じて、なんというか報われたような気持ちになるんだ。多分天王寺も同じ気持ちだろう。
「もう時間だから行かなきゃ」
「そうだな。じゃあな天王寺」
「うん。友紀さん、また後で」
「ああ、また後で」
　手を振って天王寺と別れる。
　……あれ？　さっき天王寺また後でって言った？　どういうことだ？　放課後また会おうってことか？　でもそんな約束はしてないし……。
　どういう意味で言ったのか聞こうと振り返るが、すでにそこに天王

寺はいなかった。いったいどういう意味だったのだろうか……。

第6話

放課後。

普段なら自宅あるいはバイト先に直行している時間だ。だが今日はスクールアイドル同好会に行くために部室棟に来ていた。そういえば部室棟に来るのは初めてだな。部活には初めから入るつもりがなかったから部活の見学に行くこともなかったし。

建物を外から見てもデカいとは思っていたが、中から見るとさらにとてつもない広さに感じるな。壁一面に部室がずらりと並んでいる。それが3階も。ここは本当に学校か？　部室棟だけでこんなに広い学校見たことないぞ。ほかの施設も異常な広さだし。マジで何なんだこの学校は。

1階中央にある案内板を見るとどこにどの部活の部室があるかが書いてあった。しっかしマジで数が多いな。サッカー部や野球部などメジャーなものから、流しそうめん同好会や魔法少女同好会などよくわからないものまで。案内板があって助かった。ていうか流しそうめん同好会実在したんだ。焼き菓子同好会やコッペパン同好会なる同好会もあるが、それは調理部じゃダメだったんですかね？

「あれ？」

案内板を一通り眺めるがスクールアイドル同好会のという名前を見つけることができなかった。見落としたか？　もう1回ちゃんと見るか。

「ないんだけど……」

何度もじっくりと探したがやはり見つけることができなかった。何故だ？　実はスクールアイドル同好会は最近できたばかりの同好会で、まだこの案内板に反映されていない、とか？　ありえるな。むしろそれ以外ありえないだろう。

ふざけんなよ。なんで反映してないんだよ。ちょんと仕事しろよ。生徒意見箱に文句書いて入れるぞコラ。

もしかして、部室をしらみつぶしに探さなきゃいけない系ですか？　さすがにやばくね？　どんだけ広いと思ってるんだ。どんだけ部

室があると思ってるんだ。
「昨日高咲に部室の場所聞いておけばよかったなぁ……。探すのめんどくさいなぁ……。今日はもう帰っちゃダメかなぁ……」
しばらく案内板の前でうだうだ言いながらうろうろいたが、こうやってうだうだ言っている時間が一番無駄だということに気が付いた。
文句ばかり言ってても状況は何も変わらないか。口よりも先に足を動かさなきゃだな。
「あのー」
「よし、やるぞー」
気の遠くなるような作業だが、根性があればなんとかなるだろう。天王寺の作ったゲームと比べたらヌルゲーだ。
「あのー……」
まずは1階からだ。運良くこの階で見つかるといいな。
「あの、無視しないでください」
早速1つ目に行こうと足を踏み出したが突然体を後ろに引っ張られる。どうやら誰かが俺の服を引っ張ったようだ。誰なのかを確認しようと振り返ると、そこには美少女がいた。
腰まで届くほど長いダークブラウンの髪。その長い髪をお嬢様結びにし、赤いリボンでそれを纏めている。そして透き通ったライトブルー美しいの瞳。端正な顔立ち。黄色いリボンだから天王寺と同じ1年生か。
特徴的なリボンによって一見子供っぽく感じるが、後輩ということもあってこの子供っぽさが逆に良いアクセントとなり、むしろ可愛さと美しさを両立させるためのアイテムとなっている。なんだこの美少女は。
髪色も派手な色ではなく、制服もまったく着崩していない。立ち姿も背筋をしゃんとしており、まだ一言も交わしていないのに礼儀正しい印象を受ける。髪型がお嬢様結びということもあり、清楚系お嬢様というイメージが俺の頭の中で組み上がっていく。なんだこの美少女は（2回目）

天使が舞い降りてきたのだろうか。思わず見惚れてしまう。これが一目惚れだろうか。しばらく彼女を見つめていたのだが、途中で彼女が頬をぷっくらと膨らませているのに気付き、可愛いと思いつつも我に返る。
「えっと、何か怒ってる？　俺、君に何かした？」
「しました。さっきから私が呼び掛けているのにまったく反応してくれませんでした」
「え、マジ？　それはごめん」
全然気が付かなかった。
「何か俺に用だった？」
「先輩が案内板を見て困っているように見えたので、もしかしたら目的の部活を見つけられなかったのかなと思ったので」
「ああ、実はそうなんだよ。最近できたばかりの同好会なのか案内板に書いてなくて困ってたんだ」
「やっぱりそうでしたか。どの同好会を探していたんですか？」
「スクールアイドル同好会っていうとこなんだけど、部室の場所知ってる？」
「なるほど、スクールアイドル同好会ですか……。もしかしてこの人が……」
「どうかした？」
「……いえ、なんでもないです。部室の場所なら知ってますよ。よければ案内しましょうか？」
当たりだ。部室の場所を知っていて、しかも案内までしてくれるようだ。なんて優しい子なんだ。でも、案内してくれるのはありがたいけどさすがに申し訳ないな。部室棟にいるってことは彼女もこれから部活だろうし。これ以上俺なんかに貴重な彼女の時間を使わせるわけにはいかない。
「いや、場所を教えてくれるだけで十分だ。君も忙しいだろ？」
「いえ、ちょうど私もスクールアイドル同好会に用事があるのでそのついでです」
「そうなのか。じゃあ案内お願いしようかな」

「わかりました。こっちです、ちゃんと付いてきてくださいね」
　彼女はニコニコしながら俺を先導する。ニコニコしている彼女はとても愛らしいが、何故そんなに楽しそうなのかわからない。人助けが好きなのだろうか？　天使か？　それとも女神か？　俺とは大違いだな。
「先輩はスクールアイドルが好きなんですか？」
「いや、そんなに。そもそも見たこともないし」
「好きでもないのに同好会に行くんですか？　いったい何の用で？」
「ボランティア活動かな。生徒会長の指示でしばらくの間同好会の手伝いをするんだよ」
「なるほど、そうなんですね」
　雑談をしながら彼女に付いていく。
「部室棟に来てたってことは君も部活に入ってるんだろ？　何部なんだ？」
「そうですね、演劇部ともう１つは……秘密です。いずれわかると思いますよ」
　もう１つ、ということは演劇部と何かを兼部しているのだろう。いずれわかるというのはどういうことだろうか。彼女が有名な部活の有名な選手ということだろうか。
「着きましたよ。ここがスクールアイドル同好会です」
　彼女が指差したドアを見ると『スクールアイドル同好会』と書かれたプレートが掛けられている。ここがスクールアイドル同好会の部室かぁ。
「先に入ってますね」
　彼女はそう言うとドアを開けて部室に入っていく。そういえば、彼女が言っていた用事というのはいったい何なのだろうか。案内板に書かれていないスクールアイドル同好会の部室の場所を知っていた理由も謎だ。生徒会にも彼女のような子はいなかったし……。
「しずくちゃん、おはよう」
「侑先輩、おはようございます」
　高咲の声が聞こえる。しずくというのは俺を連れてきてくれた彼

女の名前だろう。なるほど彼女はスクールアイドル同好会の部員だったのか。いずれわかる、という彼女の発言の意味がわかったよ。
「例の人を連れてきましたよ。まだ入ってきていませんけど」
「ありがとうしずくちゃん。私迎えに行ってくるよ」
部屋の中から高咲が出てくる。
「昨日ぶりだね、村上君」
「ああ、昨日ぶりだな、高咲」
「さぁ、早く入って入って。皆楽しみにしてたんだよ」
同好会にはどんな人がいるのだろうか。1ヶ月程度（希望的観測）の短い付き合いだが、部員の皆さんとは是非とも仲良くしたいものだ。
高咲に手を引かれてそのまま部室に入る。
「侑先輩、その人が昨日言ってたお手伝いさんですか？」
部室に入って最初に目に入った人物は灰色のショートヘアーの可愛らしい女の子。
「うん、そうだよ。紹介するね。情報処理学科2年生の村上友紀君」
「よろしくお願いします」
「普通科1年、中須かすみで～す。友紀先輩、よろしくお願いしま～す。私のことは気軽にかすみんって呼んでくださいね～」
「よろしくな、かすみん」
最初に目に入った彼女は中須かすみというらしい。本人がかすみんと呼んでくれと言うので、本人の希望通りかすみんと呼ぶ。多分可愛い系スクールアイドルとしてやってるんだろうな。
次にかすみんの隣にいる俺を連れてきてくれた彼女に目を向ける。
「国際交流学科1年の桜坂しずくです。友紀先輩、よろしくお願いしますね」
「桜坂か、よろしく。さっきはありがとう。助かったよ」
「どういたしまして。私もいろんな話ができて楽しかったです」
俺もとても楽しかったです。
「次はアタシかな？　アタシは宮下愛、情報処理学科2年。よろしく！」

「よろしくな、宮下」
金髪のポニーテールで、なんとなくギャルっぽい見た目の宮下愛。
名前だけは聞いたことがあった。いろんな部活に助っ人として参加し、強豪校との試合に何度も勝っているようだ。その凄まじい活躍に『部室棟のヒーロー』とまで呼ばれている。特定の部活には入っていないと聞いたことがあったがスクールアイドルをやっていたのか。
「次は私。友紀さん、昼休み振り」
声のする方を見ると見知った顔がそこにいた。
「天王寺？　天王寺もスクールアイドル同好会に入っていたのか？」
「うん」
なるほど、昼休みに言っていたまた後でとはこういう意味だったのか。
「あれ？　友紀とりなりー知り合いなの？」
「うん、ゲーム友達」
「そうだったんだ。全然知らなかった」
「友紀さんと会ったのは昨日のことだから。これからは同好会の仲間。よろしく」
「ああ、よろしく」
「次は私ね。ライフデザイン学科3年の朝香果林よ」
青みがかった黒髪でウルフカット、非常に良いスタイルをお持ちの朝香果林先輩。冷静沈着っぽい感じで、なんとなく勉強が得意そうだ。身長も俺よりも高く、立ち振る舞いも大人の女性といった感じだ。どこかで名前を聞いたことがある気がするのだが俺の気のせいだろうか。
「あなたが同好会の手伝いねぇ……」
なんだか朝香先輩に値踏みをするような目で見られてる気がする。怖い。
「頼りなさそうな感じがするのだけれど大丈夫かしら」
頼りなさそうでごめんなさい。頼りないなりに精一杯頑張るので許してください。
「もー果林ちゃん。いじめたらダメだよー」

「あら、私はいじめてなんかいないわよ。それより、エマは自己紹介しなくていいの？」
「うん、そうだね。私はエマ・ヴェルデ、国際交流学科の3年生だよ。よろしくね、友紀君」
「ええ、よろしくお願いします」
　赤毛で三つ編みおさげのエマ・ヴェルデ先輩。名前からして外国人、留学生だろうか。頬にあるそばかすが特徴的だな。朝香先輩とすごく仲が良さそうに見える。話し方がすごくおっとりしていて、なんだか聞いているだけで癒される。どこがかは言わないがデカい。すごくデカい。あと身長も俺より高い。けど朝香先輩よりは少し小さいか？
「次は彼方ちゃんの番、昨日ぶりだね～友紀君」
「近江先輩もスクールアイドル同好会に入ってたんですね」
　俺の知り合い、スクールアイドル同好会に入ってる率高くない？
「これからは練習の後一緒にバイトに行けるね～」
「そうですね、よろしくお願いします」
「よろしくね～」
　昨日はあんなことを言っていたが、どうやらまた一緒にバイトに行ってくれるようだ。あの人の考えはよくわからないな。
「村上君、彼方さんとも知り合いだったんだ」
「ああ、バイト先が一緒なんだ」
「そうなんだ。なんか知り合い多くない？」
「多いな」
　俺が一番驚いてるよ。
「次は歩夢だね。……歩夢？」
「……え？　もう私の番？」
「どうしたの？　ぼぉーとしちゃって……もしかして体調でも悪いの？」
「ううん、大丈夫。なんでもないから……」
　歩夢と呼ばれる子を見る。ピンク色の髪で、特徴的なお団子ヘアー、そして可愛らしい顔立ち。忘れもしない、あの時の子だ。この

学校に通っていたのか。あの時は服装なんかまったく見てなかったし、全然気が付かなかったな。というよりは下着が見えてたから見られなかっただけなんだけど。
　それにしても、こんな所で再会するなんて奇跡だな。久し振りの意を込めて小さく手を振ると、頬を少し赤く染めながらも微笑みながら手を振り返してくれた。可愛い。
「普通科2年の上原歩夢です。これからよろしくね、ゆ、友紀君」
「ああ、よろしくな上原」
「歩夢でいいよ。同じ学年だし、これからは同じ同好会の仲間なんだし」
「そうか、じゃあ……歩夢、これからよろしく」
「っ！　うんっ、よろしくね♪」
「最後は私ですね。2年、優木せつ菜です。私のことはせつ菜と呼んでください。これからよろしくお願いしますね、友紀さん」
　黒髪のストレートロングヘアーの優木せつ菜。ペカーという擬音が似合う笑顔がとても素敵。話し方がハキハキとしていて元気いっぱいという印象を受ける。けど身長は天王寺の次くらいに小さい。
　せつ菜とは初めて会ったはずなのに何故かどこかで会ったことがある気がするんだよな。誰かに似ているからかな。でも誰に似てるかわからないんだよな。あとちょっとで出てくる気がするんだが……。
「あっ、わかった！　生徒会長に似てるんだ。だから初めて会った気がしないんだ」
「え？」
　髪型は三つ編みじゃないし眼鏡もかけてはいないがよく似ている。身長も顔立ちも黒い瞳も声質も生徒会長とそっくりだ。ここまで似てると生徒会長本人じゃないかとすら思えてくる。
「実は生徒会長本人だったりしない？」
「き、きき、気のせいですよ」
「そうかー」
　うーん、これもう生徒会長でほぼ確じゃね？　昨日生徒会長が口ご

もった理由はこれか。優木せつ菜という偽名を使ってまで正体を隠したい理由はわからないが、多分深い事情があるのだろう。もしくは単純に俺がちゃんと仕事をするか調べるために潜入しているか。どちらにしても変装のレベルが低くないか？　俺は割とすぐにわかったんだけど、他の人には気付かれていないのだろうか。

「まあいいや。せつ菜、これからよろしくな」

「はいっ、よろしくお願いします！」

理由が何であれ、生徒会長……いや、せつ菜が正体を隠したいのであればそれに付き合おう。

「これで皆自己紹介が終わったね。それじゃあ改めて……」

『スクールアイドル同好会にようこそ!!』

「私たちは友紀君を歓迎するよ」

「ああ、ありがとう。俺からも改めてよろしく頼む」

番外編　優木せつ菜誕生日記念

今日は8月8日。俺の愛しい彼女の誕生日だ。
中川菜々、またの名を優木せつ菜。
虹ヶ咲学園の生徒会長として学校のために頑張る中川菜々。真面目で成績も優秀。教師からは信頼され、生徒からの支持も厚い。まさに理想的な生徒会長。普段はクールで無表情だが、時折見せる微笑みがとても可愛いらしい……と、クラスの男子が言っていた。俺もそう思います。目に入れても痛くないくらい可愛い。
そして、スクールアイドルとしてみんなに大好きを届ける優木せつ菜。いつも元気で明るく情熱的。見る人全員を笑顔にさせられるスクールアイドル。普段はすごく子供っぽいのだが、ライブになるとクールでかっこいい、推せる……と、クラスの男子が言っていた。俺もそう思います。目に入れても痛くないくらい推せる。
菜々もせつ菜もどちらも魅力的で、どちらもとてもとても大切な彼女だ。
今日はそんな彼女との久し振りのデートだ。最近は俺の家でゲームをしたりアニメを見たりすることが多かったため、家の外に出てこうやってデートをするのは本当に久し振りだ。
「楽しそうだな」
せつ菜は楽しそうにニコニコしながら俺の隣をスキップしている。せつ菜が楽しそうで俺も嬉しいよ。でも、手を繋いだままスキップするのはご遠慮願いたいです。
「だって久し振りのデートですよ？　楽しくないわけがありません！」
「それもそうだな」
「それに、この後は同好会の皆さんがパーティーを用意してくれますし、今からとても楽しみです！」
デートの後は俺の家でせつ菜の誕生日パーティーがあるのだ。歩夢に合鍵を渡してあるので、俺たちがデートをしている間に同好会の皆が料理や飾りつけなどをやってくれているだろう。俺のミッショ

ンはせつ菜を楽しませつつ、パーティーの準備が完了した頃に家に連れて帰ることだ。最低限料理が出来上がった後でなければならない。せつ菜の性格上、帰った時に料理が出来上がっていなければ自分も作るのを手伝うと言い出すだろう。そうなれば確実に死人が出る。それだけは避けなければならない。

「友紀さんはいいんですか？　折角のデートなのに私の見たい映画に連れてってもらって」

「大丈夫だ、俺もこの映画は気になってたし」

今日のデートのメインは映画だ。日本で多分一番有名なロボットアニメの映画が3部作で制作されることが発表されて、今から見に行くのはその1作目だ。少し前にカボチャのお面を着けた男が映画の主題歌に合わせてよくわからないダンスを踊る動画が投稿されネットで話題になった。そのダンスは絶対本編とは何の関係もないのだろうが、その動画を見たせいでこの映画を見たくなってしまったのだ。

「それに、今日は誕生日のお前が主役なんだ。お前が行きたいところに連れてってやるし、お前のしたいことをさせてやる。だから遠慮するな」

「本当ですか!?　じゃあ映画が終わったら一緒にクレープを食べに行きたいです！　それから本屋にも行って、それからそれから……」

どうやらせつ菜は行きたいところ、したいことがたくさんあるようだ。全部回れるかは微妙だが、できるだけせつ菜の希望に沿ったデートプランを組んであげたい。頭の中だけでプランを考えるのはなかなか大変だ。でも、それでせつ菜の笑顔が見られるのなら頑張る以外の道はないな。

「いや～、すっげえ完成度だったな。正直予想以上だった」

これは2作目も期待できるな。

「わかります！　ストーリーの構成も完璧で、胸が熱くなる展開でした！　バトルシーンの作画も最高でした!!　そして何よりも」

「「音楽!!」」
「そう!!　音楽がとてもかっこよかったです!!　特に主題歌のサビの盛り上がりがもうたまらなくて、今すぐにでもカラオケで歌いたいです!!」
「わかる！」
　あの謎ダンスの印象が強すぎたが、改めて聞くとすごくいい曲だ。
「今度一緒に学校のカラオケで歌おうな」
「もちろんです！　２作目が公開されたらまた一緒に見に行きましょう！」
「ああ、もちろんだ」
「絶対、絶対ですよっ!!」
　クールな生徒会長モードの菜々も素敵だが、テンションが上がって熱くなったせつ菜も素敵だ。たまにテンションが上がりすぎて暴走してしまうこともあるが、その時のせつ菜は早口の長文で話すので話についていけないことがほとんどだ。ついていけるようになるにはまだまだ努力が必要だ。

「ここのクレープすごくおいしいです！」
「ああ、本当においしいな」
「前に歩夢さんに教えてもらったお店なんですけどこんなにおいしいとは思っていませんでした」
「そうか、歩夢がここを教えてくれたのか」
　さすが女子力の高い歩夢だ。せつ菜へのプレゼントをどうすればいいかも歩夢に聞けばよかったかなぁ。
「むぅ～」
「ん？　どうした？」
　せつ菜の方を見ると、何故か頬を膨らませていた。フグみたいで可愛いな。試しに膨らんだ頬を指で押すと口から空気が漏れ出した。風船みたいで可愛いな。
「今私のこと女子力がないと思いましたね？」

ギクリッ。
「オモッテナイヨ」
「嘘ですね」
さすがにせつ菜に嘘は通じないか。
「歩夢さんに比べたら女子力は低いかもしれませんけど……でもまったくないわけではないんですよ？　料理だってできますし」
「ウン、ソウダネー」
確かに料理はできるな。食べた人が気絶することを除けばな。
「デートの時はいつも以上におしゃれに気を使ってるんですよ？」
「そうなのか？　でも、言われてみれば確かにデートの時はいつも以上におしゃれな服を着てる気がするなぁ……」
「気付いてなかったんですか……」
「ごめん。せつ菜はいつも可愛いから言われないと違いがわからなくて……」
「も、もうっ！　そんなこと言ったって騙されないんですからね！……でも、今回だけは許してあげます。次はありませんからね」
「はーい、気を付けまーす」
チョロい。でもそういうところが可愛い。
「あっ、口元にクリームがついてますよ」
「え？　どこどこ」
「ふふっ、私が取ってあげますね」
せつ菜は指で俺の口元についたクリームを拭い、それを自分の口へと運ぶ。
「顔が赤くなってますよ？　もしかして照れてるんですか？」
「違うし～、照れてなんかないし～」
「ふふっ、友紀さんは可愛いですね」
ああ、顔が熱い。

「これ、今日発売の新刊ですよ！」
「ああ、前にせつ菜が読んでたシリーズの新刊か」

「そうです！　たまたま今日が発売日だったんです！　人気シリーズなのでもしかしたら売り切れてるかもと思ったんですけど、運よく最後の1冊が残ってました！」
「そうか、それは良かったな。で、それもうちに置いておけばいいのか？」
「はい、お願いします！」
　家庭の事情で自分の趣味をオープンにできないせつ菜は付き合い始めてからは俺の家にラノベやアニメのＢＤなどを置くようになった。最初はあまり数は多くなかったのだが、親にバレる心配がなくなったからなのかその数はどんどん増えていった。もともとうちにあった本棚では入りきらなくなり、少し前に新しい本棚を買ったばかりだ。
「いつもありがとうございます」
「気にしなくていいぞ。俺もせつ菜の本を読んだりしてるし」
「そうですか。じゃあこのシリーズは読みましたか？」
「読んだよ。３巻で主人公が――――」

「いきますよ！」
「ちょ」
「せつ菜☆スカーレットストームッ!!」
「うわーっ！」
　せつ菜にゴールを決められてしまう。
「エアホッケーは私の勝ちですね！」
「はぁ……はぁ……せつ菜強すぎるぞ……」
　せつ菜が打ったパックをまったく目で追えず、気が付いたらゴールにパックが入っていた。俺の完敗だ。
「これで2勝1敗、私の勝ちです！」
　初戦のダンスゲームではせつ菜の圧勝。２戦目のシューティングゲームは俺の圧勝。そして最終戦のエアホッケーはせつ菜の圧勝。運動ではせつ菜には勝てないよ。特にダンスはせつ菜の本職だし。

「あー疲れたー」
「お疲れさまでした」
「せつ菜はまだまだ元気だな。さすがスクールアイドル」
「スタミナ練習は欠かしてませんからね。ライブで1曲踊りきるのにはかなりスタミナが必要ですから」
　俺も皆と一緒に走ってるんだけどなぁ……。せつ菜と比べたらまだまだということか。
「そろそろ帰ろうか。もう準備が終わってる頃だろうし」
「そうですね、パーティー楽しみです！」

　夕暮れの中、せつ菜と手を繋いで仲良く家路につく。楽しかったデートももう終わりの時間だ。
「友紀さん、今日はありがとうございました。おかげですごく楽しい誕生日になりました」
「どういたしまして。俺もすごく楽しかったよ。でも、誕生日はまだまだこれからだぞ。今から楽しい楽しいパーティーの時間だからな」
「そうですね」
　用意していたプレゼントを渡すならこのタイミングか。
「せつ菜。実はプレゼントを用意してるんだ」
「プレゼント……ですか？」
「あまり期待しないでほしいんだけど……」
　バックの中からプレゼントを取り出す。頑張ってせつ菜に喜んでもらえそうな物を選んだが、果たして喜んでもらえるだろうか……。
「これはリストバンド、ですか」
「ああ。せつ菜に似合いそうなものを作ってもらったんだ」
　赤色をベースに両端に白いライン。中央にはせつ菜のイメージに合うと思ったスタンドマイク。その反対側には『ＳＥ・ＴＳＵ・ＮＡ』の文字。センスがないなりに頑張ってせつ菜に合うデザインを考えた。
「すごく嬉しいです!!　大切に使わせてもらいます!!」

「そうか、喜んでもらえて嬉しいよ。よければ今着けてくれないか？」
「もちろんです！　……どうですか？　似合ってますか？」
「ああ、似合ってるよ」
　本当によく似合ってる。プレゼントしてよかった。
「本当ですか!?　嬉しいです!!　今度のライブで使わせてもらいます!!」
　ライブでも使ってもらえるのは嬉しいな。でも少し恥ずかしい。
「私からもお返しあげますね。目をつぶっててもらえますか？」
「わかった」
　言われた通りに目をつぶる。すると、口に柔らかい感触がした。これってもしかして……。
「どうでしたか……？　私からのお返し、ちゃんと受け取ってもらえましたか……？」
　目を開けると顔を真っ赤にしたせつ菜がいた。多分俺の顔も真っ赤だろう。熱があるんじゃないかというくらい顔が熱い。
「う～ん、よくわからなかったな。もう一回お願い」
「も、もう一回ですか!?」
「冗談だよ、冗談。ちゃんと受け取ったよ。最高のお返しだった」
「それはよかったです。私の初めてをあげたんですから、これからも私のこと大切にしてくださいね？」
「もちろん。……せつ菜、改めて誕生日おめでとう。これからもよろしく」
「はい！　よろしくお願いします!!」

第7話

「顔合わせも終わったことだし、早速練習始めよっか」
「俺は何すればいい？」
「村上君は今日は皆の練習を見て回ってもらおうかな。運動できる服は持ってる？　持ってるなら一応着替えて」
「了解」
　たまたま今日は体育がある日だったからジャージを持っている。使用済みだけど、まぁ別に問題ないだろう。
「俺は外で待っとくから先に着替えてくれ」
「ん？　……あ、そっか。村上君男の子だもんね。うっかりしてたよ」
　うっかりしすぎでしょ。俺が言い出さなきゃ高咲はそのまま着替え始めてたんじゃないだろうか。
「それじゃあお願いするね」
「ああ」
　少し残念だが大人しく部屋から出て、ドアが開いてもうっかり部屋の中が見えないようにドアの横に移動する。やっぱり言い出さなきゃよかったなぁ……。

　スマホでゲームをしながら皆が出てくるのを待つが、さっきから楽しそうな笑い声の中に混じって時折うっすらと聞こえてくる服を脱ぐ音が少しずつ俺の精神を削ってくる。この程度で精神を削られていてこの先やっていけるのだろうか。
　とりあえず、これから部室に入る時はノックしてから入るようにしないと。誰かが着替えてるタイミングで入ったら最悪だ。今日入るときは忘れていたが、今考えればなかなか危ない状況だったな。運が悪かったら人生が終わってた。
「おまたせー」
　しばらくすると部屋から高咲が出てきた。学校指定のジャージを着ているが、上着は着ずに何故か羽織っている。着ないなら部室に置いてけばいいのに。ジャージを羽織る姿が似合ってるのも謎だ。あ

なたは海軍大将か何かですか？　仮に海軍大将だとしても、光の速さで俺を生徒会室に連行するのだけはやめてほしいな。
「ちゃんと覗かないようにしてるね。えらいえらい」
「いや、何故頭を撫でる」
「ん～、覗きを我慢したご褒美？」
　ご褒美って、覗きをしないという人として当然のことをしただけだぞ。そもそも、昨日出会ったばかりで生徒会長に呼び出されるような信用ゼロの男の頭を普通撫でますかね？　この子距離感バグってないですかね？
　それにしても、高咲は頭を撫でるのが上手いな。すごく気持ちよくて、なんだか落ち着く。猫もこんな気持ちで撫でられているのだろうか。もっと撫でてほしい。でも、撫でられるとゲームに集中できない。ゲームに集中できないのは非常に困るので、名残惜しいが頭をブンブン振って手を振り払う。
「あっ……なんで振り払うのー。撫で心地良かったのにー」
「ゲームに集中できなかったから」
「恥ずかしかったとかじゃないんだね……」
「あー、恥ずかしさは一切感じなかったな」
　気持ちよさはめちゃくちゃ感じてましたけどね。
　昨日近江先輩に撫でられたときは恥ずかしくて仕方なかったのに、高咲が相手だと全く恥ずかしくないのは何故だろうか。高咲が海軍大将スタイルだからか？　それとも、高咲相手だからとか関係なく、今はゲームをしてるから恥ずかしさを感じないだけか？　まぁ多分後者だろう。海軍大将スタイルの高咲も普通に可愛いし。
「そっかー。恥ずかしがってる村上君が見たかったのに、まったく恥ずかしくなかったのかー。ちょっと自信なくしちゃうな。私って魅力ないのかな」
「いや、高咲に一切魅力を感じないとかじゃなくて、多分ゲームをしてたから恥ずかしさを感じなかっただけだから。高咲はめちゃくちゃ魅力的だと思うぞ。１００人中９８人は高咲と付き合ってみたいって言うと思う。だから自信持てよ」

「うーん……魅力的って言われてちょっとだけときめいちゃったけど、やっぱりゲームしながら言われてもなぁ……。あと、そこは１００人中１００人って言ってほしかったな。なんで中途半端な９８人なの？」
「だって世の中には変わった人もいるし」
「村上君はどっちなの？」
「付き合ってみたい派」
「そっか。……さすがに照れちゃうな……」
　横目でチラッと高咲を見ると頬が少しだけ赤くなっていた。どうやら本当に照れているようだ。
「ちなみに、村上君は私のどういうとこが魅力的だと思うの？」
「まず高咲はすっごい可愛いだろ？　ツインテールも女の子っぽくて似合ってるし、緑色の毛先が高咲の良さを引き立ててる。あと高咲って優しいじゃん？　出会ったばっかの俺を心配してくれるし。あと高咲はいつも楽しそうだし、一緒にいて楽しいし。あっ、あと笑顔が素敵だな。昨日俺を捕まえやがった時の満面の笑顔は特にすごかった。正直見惚れた」
　あとこれは高咲には絶対に言えないが、高咲のえっちな体つきもすごく良いと思います。お胸も小さすぎず大きすぎずの一番好きな大きさです。それがジャージで強調され、高咲が腕を組むことによってさらに強調されている。破壊力がヤバい。高咲のジャージ姿＋腕組みはまさしく破壊兵器だ。
「高咲とはまだまだ付き合いが浅いからこの程度しか思いつかないけど、俺が気付いてないだけできっとまだまだ魅力はあると思う」
「え、あ、うん……」
　随分と歯切れの悪い返事をする高咲。その顔は茹でたたこのように真っ赤に染まっている。なんかたこ食べたくなってきたな。スーパーで安く売ってたら買おうかな。
「もしかして照れてる？」
「照れるに決まってるじゃん！　あんな真剣な顔であんなこと言われたら誰だってときめいちゃうよ……。それに、なんで今度はちゃんと

こっちを見て話したの？」
「ロード画面だったから」
「そんな理由!?」
「当然」
　ロード画面じゃなかったらまたゲームしながら話してたな。その場合だと高咲はどんな反応をしたのだろうか。多分照れてはくれなかっただろうな。照れさせることは元から目的ではないけど。
「あ、でも今言ったことに嘘偽りはないぞ。全部俺が心の底から思ったことだ」
「うぅ……そういうのずるいよ……。……もしかして村上君、私のこと口説いてる？」
「いや、全くそんなつもりないけど」
「だ、だよね。付き合ってみたい派って言うからもしかしたらって思って……」
「まぁ確かに付き合ってみたいとは言ったね」
「それに言ってることもそれっぽかったし……」
　思い返してみると確かにそれっぽい内容を話した気がする。可愛いとか一緒にいて楽しいとか笑顔が素敵とか。付き合ってみたいとも言ったし、口説いてると思われても仕方ないのか？
「でも、村上君って女の子を口説いたりするタイプに見えないし、ゲーム優先だし、そんなことあるはずないよね」
　まぁ口説いたりするタイプには見えないわな。実際口説いたことなんか一度たりともないし、ゲーム優先だし。
「み、皆遅いね。私ちょっと見てくる」
　確かに皆遅い。未だに高咲以外誰も出てきていない。着替えにここまで時間かかるだろうか。
「皆何して……えっ？」
「「あ」」
　高咲が部室のドアを開けると、天王寺、桜坂、かすみんの３人が廊下に倒れ込んだ。
　天王寺の練習着は青緑のパーカーに白の短いスカート。そして黒

のストッキング。すごい女の子っぽくて可愛い。おしゃんてぃー。でも下着が見えそうで心配だ。
桜坂は青のTシャツに水色のズボン。そしてリボンが赤色から黄色に変わっている。天王寺と比べて非常にシンプルだか、逆にそれがいい。可愛い。
かすみんは黄色のパーカーに先が少しだけフリフリのハーフパンツ。ハーフパンツは紺色をベースに縦に細い黄色い線が入っている。そのハーフパンツすごくいいな。かすみんによく似合ってる。可愛い。
3人の練習着をじっくりと眺めたところで、3人が倒れこんだ理由について考える。
普通にドアから出ようとしただけなら高咲がドアを開けても倒れ込むようなことにはならない。ドアにもたれかかっていたとすると仰向けに倒れるはずだ。だが、3人ともこちらを向いて倒れている。となると導き出される答えはほぼ1つ。
「さてはお前ら……」
「か、かすみんたち盗み聞きなんてしてないですよ～」
「誰も盗み聞きをしたかどうかなんて聞いてないんだがな」
「うっ……」
「盗み聞きしたんだな？」
「し、してないですぅ」
「怒らないから正直に言っていいぞ」
「うぅ……し、しました……」
「かすみさん、今の友紀先輩の言い方は絶対に怒る言い方ですよ……」
桜坂の言う通り、さっきの言い方をした人は相手が正直に言っても絶対に怒るな。まぁ俺は怒らないけどね。なぜなら俺は正直者だから。あと1年生ズが可愛いから。
「ひぇ～……かすみんちゃんと謝りますから怒らないでくださいぃ」
「別に怒ってないよ。聞かれてまずいことを話してたわけじゃないし」
そもそも、聞かれてまずい話ならこんな簡単に盗み聞きできるよう

な場所でしない。
「ちなみに、誰が盗み聞きしようって言い出したの？」
「りな子です」
　りな子っていうのは天王寺のことか？　この子、あだ名の付け方が独特すぎないか？
　それにしても、天王寺が言い出したのはかなり意外だな。あんまりそういうことをするタイプには思えなかったから。
「言い出したのは私じゃない。私は『友紀さんと侑さんが面白そうな話をしてる』と言っただけ」
「面白そうな話をしてるって言ってる時点で天王寺は確実に盗み聞きしてるよね？」
「盗み聞きはしてた。侑さんがすごくニコニコして部室から出ていくから、友紀さんと侑さんがどういう関係か気になったから」
　天王寺は正直者だな。正直な子は好きだぞ。俺と高咲の関係が気になる理由はよくわからないが。そんな気になることかねぇ？
「でも私は2人を誘ってはいない。しずくちゃんを誘ったのはかすみちゃん」
「ちょっ、りな子ぉ」
「そうか、桜坂を誘ったのはかすみんか」
「だってだってぇ、しず子も興味ありそうな顔してたからぁ」
「かすみさん！」
「ケンカすんなって。誰が言い出しっぺでも、誰がどんな理由で盗み聞きしても怒りはしないから。……ちなみに、天王寺はどこから俺らの会話聞いてた？」
「途中から」
「具体的には？」
「侑さんの『おまたせー』から」
「それ一番最初」
　俺らの会話全部聞いてるやんけ。何なのこの子。俺らの関係に興味津々すぎない？　何なの？　高咲のこと好きなの？
「かすみんと桜坂はどこから？」

「『覗きを我慢したご褒美？』って所からです」
「それほぼ最初」
　かすみんと桜坂もほぼ全部聞いてるやんけ。天王寺はどのタイミングで面白そうな話って判断したんだ。そこまでに面白い会話なかっただろ。
「侑先輩も友紀先輩も楽しそうでしたね。魅力的だとか可愛いだとか付き合ってみたいだとか、まるで口説いてるみたいでした」
「当然そこも聞いてるよなぁ……。……忘れてくれない？」
「無理ですね。あんな会話簡単には忘れられませんよ。あーあ、かすみんうっかり口を滑らしちゃうかもです」
　こいつ、俺を脅すつもりか？　さっきまで怒られないかビクビクしてたくせに。この程度の脅しに俺が屈すると思うなよ。
「ジュース1本で手を打たない？」
　冷静に考えたらこの話が他の人に漏れたら結構ヤバい気がしたので簡単に脅しに屈します。ジュース1本で安全が買えるなら安いもんだ。
「いいですよ、それでお口にチャックを付けてあげます」
「私も口が滑るかもしれない」
「わかったわかった。天王寺と桜坂にも奢るよ」
「私は大丈夫ですよ？　言いふらすつもりはないので」
「折角だし桜坂も奢られとけ？　万が一桜坂の気が変わった時に交渉材料に使えるからさ」
「……わかりました。折角なので先輩に奢ってもらうことにします」
「あっ、じゃあ私もジュースほしい！」
「えーなんで」
「だって村上君に散々恥ずかしい思いさせられたし」
　元はと言えば高咲が俺を恥ずかしがらせようとしたんじゃないか。やり返すつもりではなかったが、たまたま高咲が恥ずかしい思いをしただけで。これは俺の正当防衛ではないのか？
「友紀さん、奢ってあげたら？　私が侑さんの立場になって想像したらすごく恥ずかしかったから」

「う～ん、天王寺がそう言うなら……」
　仕方ない、高咲にも奢ってやるか。
「璃奈ちゃんの言うことには従うんだ……」
「天王寺は俺のベストフレンズだからな」
「うん、友達」
「私友紀先輩と璃奈さんがお友達というのにすごく驚いたんですけど、2人はどういう経緯でお友達になったんですか？」
「それかすみんも気になります」
「私も」
「後でよければ話してやるよ。それよりも、全員着替え終わってるみたいだし俺も着替えていいか？」
「そうだね、そろそろ村上君にも着替えてもらおっか。じゃないといつまでも練習始まらないもんね」
　本当にその通りだ。俺もついつい1年生ズと時間を忘れて話し込んでしまった。
　全員が部室から出たのを確認し、ドアを閉めて着替え始める。さっきまで皆がここで着替えていたおかげか部室がすごくいい匂いがする。この匂いの中着替えるのか……。
　いい匂いに精神を削られながらもなんとか着替え終えた。やっと練習が始まるのか。少しだけ楽しみだ。

第8話

コンコン
「友紀君、もう着替え終わった？」
ジャージに着替えていると、ノックとともに歩夢の声が聞こえた。
「ちょうど今着替え終えたとこ」
「じゃあもう中に入って大丈夫？」
「ああ、大丈夫だ」
そう返事すると、頬を少しだけ赤く染めた歩夢がゆっくりとドアを開けて入ってきた。パッと見た感じだと歩夢以外のメンバーはいなかったな。もう練習に行ったのか？
「忘れ物でもしたのか？」
「そうじゃないんだけど……少しだけ2人で話したいことがしたいんだけどいいかな？」
「ああ、構わないぞ」
「ほんと？　よかったぁ……」
多分歩夢が話したいことというのは十中八九あれのことだろう。
「友紀君は私のこと覚えてる？」
「もちろん覚えてるよ。あの時助けた子だろ？　さすがに忘れないよ。話したいことっていうのはその時のこと？」
「うん。助けてくれたのにお礼の言葉も言えなかったから……」
「あー、あの時はなるべく話しかけないようにしてたからなぁ。話しかけるのもどうかなと思って」
あと単純に何も話すことなかったし。
「そういう配慮をしてくれたのもすごく嬉しかったんだよ」
「そうか、それならよかった」
「助けてもらって、いろいろ配慮もしてくれたのに何もお礼できなくて……」
「別にいいよ、礼なんか。俺は最初逃げようとしたんだ。礼を言われる資格なんかない」
そう、俺は最初逃げようとしたのだ。あの場から一番逃げだした

かったのは歩夢のはずなのに。そんな俺が礼を言われる資格なんてない。
「でも最後は助けに来てくれたでしょ？　あの時は誰にも気付いてもらえなくて、怖くて声が出ないから助けを呼ぶこともできなくて……。もうどうなってもいいやって諦めかけた時に友紀君が私に気付いてくれて、そして勇気を出して助けに来てくれた。それが本当に本当に嬉しくて……。多分友紀君が思ってる以上だよ」
「そう、なのか？」
「だって友紀君が助けてくれなかったらきっと私は笑えてなかっただろうし、スクールアイドルも続けられなかった。それに、こうやって友紀君と笑って会うこともできなかった。今の私が笑っていられるのも、スクールアイドルを続けられるのも全部友紀君のおかげだよ」
「……」
「だから友紀君にはもっと自信を持ってほしい。資格がないなんて言わないでほしい。友紀君が自分のことをどう思っていても、誰が何を言おうと、あの時私を助けてくれたのは友紀君なんだから。私にとって友紀君は、誰よりもかっこいい最高のヒーローだよ」
「そうか……」
ヒーロー、か……。
俺にも昔ヒーローというものに憧れていた頃があった。といっても小学生くらいの頃だが。ヒーロー漫画や特撮ヒーローなんかを見るたびに彼らに憧れた。誰かの危機に駆けつけて敵を華麗に倒し、見返りを求めずにその場から立ち去るその姿に。そんな人間に俺もなりたいと思った。なれると思っていた。
だが、俺はヒーローになんかなれないと悟った。臆病で逃げ癖のある俺には到底不可能だったのだ。俺には他人の危機どころか自分の危機にすら立ち向かうことができなかった。立ち向かうどころか逃げる手段、逃げる口実ばかり考えてしまうのだ。
そんな俺はヒーローになんか絶対になれはしない。そう思ってたんだけどな……。

「俺がヒーローか……」
「うん、あの時の友紀君は誰よりもかっこよかったよ」
かっこよさの欠片もない戦い方だった気もするけどな。後ろからの不意打ちで金的を蹴り上げたり。卑怯にもほどがある。
「ありがとな。歩夢のおかげで少しだけ自信が持てた」
「うん！　どういたしまして」
これからはきっと多少危機から逃げずに立ち向かうことができる気がする。正々堂々と真っ正面から立ち向かうかどうかはまた別問題だが。
「私からもお礼を言うね。私のことを助けてくれて本当にありがとう」
「どういたしまして」
純粋な笑顔で真っ直ぐにお礼を言われるとこんなに照れるものなのか。歩夢の笑顔が素敵だから尚更照れる。
「あっ、そうだ。あれを友紀君に返さなきゃ……」
そう言うと歩夢は自分の鞄から一着の制服を取り出した。
「これ、あの時借りた制服、友紀君に返すね」
「ああ、そういえば貸してたな。ありがとう」
貸したこと完全に忘れてたわ。今日の朝着替えの時に探したけど見つからなくて、間違ってバイト先に忘れてきたと思ってたけど、そうだ歩夢に貸したんだった。
「ちゃんと消臭はしたんだけど、もし私の匂いが残ってたらごめんね」
「大丈夫、気にしないようにするから」
良い匂いがしてもくんかくんかしないように自制しようと思います。自制に失敗したらごめんね。
「あとね、このことは同好会の皆には内緒にしてほしいの。お願いできるかな？」
「制服貸したこと？」
「それじゃなくてね。いや、それもなんだけど……私が襲われたこと自体内緒にしてほしいの。皆に心配かけたくないの」
「優しいな、歩夢は。わかった。ないｓｙ『ドンッ!!』」

俺の言葉を遮るように、ドアを思いっきり開ける音が響く。
「歩夢さん！　友紀さん！　今のはどういうことですか！　説明してください!!」
歩夢、ごめんな。早速せつ菜にバレちまったよ……。あと、せつ菜さんは声のボリュームが大きいのでもう少し下げてもらえると嬉しいです。他の人にもバレちゃうだろ。
「せっ、せつ菜ちゃんっ!?　どうしてここに!?」
「忘れ物をしたので取りに来ました。わたしのことはどうでもいいです。それよりも、歩夢さんが襲われたことについてちゃんと説明してください」
「えっと、それは……」
「おいおい、生徒会長ともあろうものが盗み聞きかよ」
「ぬ、盗み聞きなんてしてないですよ……？　そ、それよりも！　襲われたことについて早く説明してください」
「天王寺達といい、せつ菜といい、何故人は盗み聞きをするのか」
それを調査するため、我々はアマゾンの奥地へと向かった。
「だって、歩夢さんが恥ずかしそうにしながら『友紀君と2人っきりで話したいことがあるから先に行っててほしい』って言うから、そんなのそういうことだと思っちゃうじゃないですか！　気になるに決まってるじゃないですか！」
だからって盗み聞きしていい理由にはならないと思うんですよ。2人きりで話したいって歩夢も言ってるんだし。ギルティですよ、ギルティ。
「あと、そういうことってなんだよ。どういうことだよ」
「それは、その……れ、恋愛的なことです！　もしかしたらお2人が付き合ってるのかもと思いまして……」
「付き合ってる？　俺と歩夢が？　ないない。俺は歩夢に釣り合うような男じゃないよ。歩夢も俺のことなんて眼中にないだろうし。な、歩夢？」
「……ウン、ソウダネ」
なんでカタコトなんですか。当たり前のことを言ったせいで呆れ

たとか？　悲しいなぁ……。いやまぁ、別に俺も歩夢のことを恋愛相手として見ているわけではないんですけども。
「そもそも、生徒会長としては生徒の恋愛に首を突っ込むべきではないのでは？」
「いえ、生徒会長としては生徒が風紀を乱していないかは大切なことなので」
「確かに」
　風紀を乱してないか確認するのも生徒会長の仕事だったな。じゃあ盗み聞きしたのも正しいことなのか。……正しいのか？
「歩夢さんが風紀を乱すような人とは思っていませんけど」
「確かに」
　歩夢は清楚だし、明らかに風紀を乱すタイプの人間ではないよな。わかるわかる。
「友紀さんは最近まで風紀を乱しながら歩いて回ってましたけどね」
「確かに」
　確かに確かに言いすぎて確かにスパイラルに陥りそうだ。
「ですが、今日はどうやらスマホを触らずに歩いていたようですね」
「まあね。えらいだろ？」
「それが当たり前のことなんですけど……。まあ、きちんと有言実行したことは褒めるべきことだと思います」
「でしょでしょ」
「今日だけでなく明日も、学内だけでなく学外でもちゃんと続けてくださいね？」
「頑張りまーす」
「そういえば、1つ友紀さんの気になった所を思い出したのですが、何故侑さんの時はすぐに反省したのですか？　私の時はまったく反省してくれなかったのに」
「だって高咲が可愛かったから」
「……それは私を可愛くないと言っていると受け取ってよろしいでしょうか」
「別にそこまでは言ってないんだけど」

改めてせつ菜をじっと観察する。ちゃんと観察したら意外と可愛い顔してんじゃん。いや、意外とじゃなくて普通にくっそ可愛いわ。三つ編みで眼鏡をかけた普段のせつ菜を記憶の中から掘り出してみるが、そっちの姿も普通に可愛かった。何故気付かなかったんだろう。それに、よく見たら身長の割に大きなものをお持ちで……。
「な、なんですか？　じっと私のことを見つめて……」
「いや、改めて見ると可愛いなって」
「可愛い!?　ほんとですかっ!?」
「ああ。今まではクソ真面目堅物鬼生徒会長のイメージが定着してたせいでお前の可愛さに気付かなかったよ。ごめんな」
「なるほど。あなたは私のことをそう思っていたのですね」
「うん」
「即答ですか。どうやらお説教が必要なようですね。明日の昼休み、生徒会室に来てください。たっぷりとお説教をしてあげます」
　そういうとこやぞ。
「あの、せつ菜ちゃん……」
「何ですか、歩夢さん？」
「さっきから友紀君の生徒会長に反応して徐々に生徒会長モードになってきてるよ」
「……あ」
　そういえば、俺も無意識のうちにせつ菜のことを生徒会長って呼んでたな。やっぱりせつ菜の正体は生徒会長だったんだな。知ってたけど。
「なるほど……友紀さん、私のことを嵌めましたね？」
「いや、そういうつもりではなかったんだけど」
「明日なんて甘いことは言いません。今からお説教です」
「だからわざとじゃないんだって！」
「私を嵌めるとどうなるか、その身をもって思い知らせてあげます!!」
「信じてくれ～っ！」

「3人とも遅かったね。もう皆ランニング終わっちゃったよ。何かあったの？」
「何もなかったですよ。ね、友紀さん？」
「ウンナニモナカッタヨ」
「あはは……」
「村上君なんでカタコトなの？　大丈夫？」
「ダイジョウブダヨ」
「ほんとに大丈夫!?」
　地獄の入り口を見たぜ……。地獄はこの世にあったんだ。
　だが、地獄の説教コースのおかげでせつ菜はあのことについては忘れてくれたようだ。歩夢の秘密は守られた。俺の犠牲は無駄じゃなかったんや……。
「それじゃあ私達も行ってくるね」
「友紀さんも一緒に行きましょう！」
「え、絶対嫌だけど？」
　疲れるし、しんどいし、明日筋肉痛になるし、そもそも絶対完走できないし。
「私も一緒に走っておいた方がいいと思うな」
「なんで？」
「だってランニングルートは覚えておいた方がいいでしょ？」
「それなら別に走らなくてよくない？　地図見るだけで十分だろ」
「でも、実際に走ったほうがすぐに覚えられますよ」
「それはそうだけどさ……」
「それに、今後のために友紀さんもスタミナをつけておいて損はないと思いますよ」
「あ、あるし。ちゃんとスタミナあるし」
　もちろん嘘ですけどね。
「友紀君も一緒に走ろうよ。友紀君に合わせてあげるから」
「でもなぁ……」
「あぁ、なるほど。友紀さんは私達に負けるのが怖いんですか？」
「は？」

「そうですよね。いくら私達がスクールアイドルとはいえ、男の子が女の子にスタミナで負けるのは悔しいですもんね」
「おいおいおい。その程度の煽りに俺が乗るとでも？」
「乗らないんですか？」
「はぁぁぁ……」
　あの程度の幼稚な煽りに乗ると思われてるとはね……。悪いけど俺は運動で誰に負けようが気にしないんだよ。運動能力で他人に劣っているのは自覚してるしな。俺を無礼（なめ）るなよ。
「その動き、少しだけイラッとしますね……」
　ただせつ菜に呆れていることを動きで表しただけなんだが、この程度でイラついているようではせつ菜もまだまだだな。
「いいでしょう。こうなったら意地でも友紀さんを連れていきます！」
「ちょっ、引っ張るな！　危ないだろ！」
「いってらっしゃーい」
　せつ菜は俺の腕を掴み、無理やり引っ張っていく。危ないでしょうが。うっかりこけたらどうするんだよ。高咲も止めてくれよ。いってらっしゃいではないんだよ。
「2人は仲が良いんだね……」
「はい！　仲良しです！」
「どこが？」
　仲良しならその手を離してくれよ……。もっと友達に対して思いやりを持って。
「せつ菜ちゃん、友紀君といるといつもより楽しそう」
「実際楽しいですよ。友紀さんは面白いことばかり話しますし、行動も予想外のことが多くて楽しいです。……まあ、校則を守らない所だけはいただけませんが」
「失礼な。俺はただ守るべき校則と守る必要のない校則を見極めてるだけだ」
「ちゃんと校則は全部守ろうよ……」
　ちゃんとした理由のある校則ならまだしも、大した理由のない無意

味な校則は守る気にならないんだよな。例えば昔からの風習とかいう理由な。皆もそう思わない？

「3人ともお帰り。村上君は……死んでる？」
「はぁ……はぁ……うっ！」
「友紀さん!?」
　あぁ、もう無理だ。限界だ。すべての力を使い切った。もう立つ力すら残っていない。
「せつ菜、遺言を……」
「遺言だなんて聞きたくないです！　まだ死なないでください！」
「今週の、金ロー……天空の城を、録画して、おいて……くれ……」
「友紀さん……今週は……今週の金ローは……風の谷ですよぉ！」
「そんな……ぁぁ……」
「友紀さん！　友紀さーんっ!!」

「2人とも何やってるの？」
「ノリ。死にかけてるのは本当だけど」
「私もノリです。楽しそうだったのでつい……」
「やっぱり仲良しなんだね……」

第9話

せつ菜による強制ランニングで失われた体力をある程度回復させた後、せつ菜達3人に練習場所を案内してもらっていた。
「まずはここだよ」
最初に連れてきてもらったのは中庭。そこでは桜坂、かすみん、エマ先輩があーあー言っていた。
「これは発声練習か？」
「うん、そうだよ」
「桜坂主体でやってるのはなんか理由でもあるのか？」
「しずくちゃんは演劇部だからね」
「ああ、なるほど」
桜坂は演劇で声の出し方を鍛えてるのか。演劇見たことないから発声練習が演劇で重要なのか知らないけど、多分そうなんだろう。知らんけど。
「あっ、友紀君達だ」
エマ先輩がこちらに気付いて手を振ってくれたのでこちらも振り返す。
「友紀せんぱーいっ！」
かすみんも手を振ってくれたのでそっちにも振り返す。
「かすみんはいつも楽しそうだな。練習してる時も楽しそうだったし」
「かすみさんはスクールアイドルが大好きですからね」
「そうか、大好きか。そりゃ素敵なことだな」
大好きなことを好きなだけできる環境にいるというのはどれだけ素晴らしいことだろうか。俺も毎日２０時間くらいゲームができる環境にいたいぜ。
「友紀先輩もやってみますか？」
「練習の邪魔になるので遠慮しときまーす」
「いいですね！」
「いいですね、じゃねぇ。おい、手掴むのやめろや」

「だってこうでもしないと逃げちゃうじゃないですか」
「逃げるとかじゃなくて、桜坂達の練習の邪魔になるから遠慮しただけだろ。歩夢達からも言ってやってくれよ」
「うーん……しずくちゃんから誘ったんだし、大丈夫じゃないかな」
「うんうん」
　俺に味方はいないのか……。誰か1人くらい俺に優しくしてくれる人がいてもいいと思います。
「せつ菜ちゃんと友紀君、とっても仲良しさんなんだね」
「いえ、違います」
「違うの？」
「いえ、仲良しです」
「どっちなの？」
　仲良くないです。せつ菜に騙されないでエマ先輩。
「仲良しですよね、友紀さん？」
「違う」
「ね？」
「断じて違う」
　無理やりランニングに連れてく奴を俺は仲良しだとは思わない。あいつ、ずっと俺の手を掴んだままランニングしやがったからな。せつ菜についていくのマジでしんどかったぞ。あと普通に危ないし。
「痛っ！」
「仲良しですよね？」
　こいつ、パワー全開で手を握ってきやがった。しかも満面の笑みで。滅茶苦茶痛いんですけど。この子力強くない？　最初せつ菜の笑顔は素敵だと思ったけど、同じ笑みでも今はものすごく邪悪に感じる。
「ね？」
「ち、違う……」
「もう！　なんで仲良しだって認めてくれないんですか！　さっきだって一緒に即興劇やったじゃないですか！」
「いや、仲良しだって認めたらなんか負けた気がして……」

「誰と何の勝負をしてるんですか！」
　俺も知らねぇ。自分とじゃないかな（適当）
「もう！　先輩達が仲良いのは十分わかりましたから！」
「うんうん。せつ菜ちゃんも友紀君もすごく楽しそうだったよ」
「いや、別に俺は楽しくなんてないんですけど」
　エマ先輩の優しい視線が辛い。
「先輩自身は気付いてなかったと思いますけど、せつ菜先輩と話してる時の友紀先輩、少しだけ口角が上がってましたよ」
「なん……だと……」
　そんなことあるはずがない。くっそー、せつ菜の勝ち誇ったような顔が腹立つ。その柔らかそうなほっぺた引っ張るぞ。あと胸を張るな。目のやり場に困るだろ。
「口ではどれだけ否定しても、体は正直ですね」
「その言い方やめろ」
　なんでそんなエロ同人とかでよくありそうな言い方するんだよ。俺がせつ菜に襲われてるみたいじゃねぇか。実際に襲われたらあのパワーには勝てなさそう。
「ねぇ」
「うぉっ！　歩夢か、びっくりした……」
　誰かが俺の肩をトントンと叩いたので、誰だろうと思い振り返ったら歩夢の顔がすぐ近くにあってびっくりした。心臓に悪いのでやめていただきたい。ドキドキで心臓が爆発したらどうするんだ。
「他の場所も回らないといけないから」
「それもそうだな。じゃあ3人とも練習頑張って。俺らは次の場所行くから」
「違うよ。その前に友紀君の発声練習でしょ？」
「えっ？　本当にやるんですか？」
「うん。友紀君の発声練習見てみたいな」
　歩夢だけは俺の味方だと思ったのに……。いや、最初っから敵だったわ。俺に味方はいなかったわ。
「友紀先輩に一度発声練習を体験してもらいたかったんですけど……

もしかして迷惑だったでしょうか？」
「え……」
　そんな卑怯な言い方する？　涙目になるのやめろよ。やめてくれよ。罪悪感感じちゃうじゃん。
「あーもう……わかったよ、やるよ」
「ふふっ、ありがとうございます、友紀先輩」
　やっぱり？泣きじゃないか。その演技力に感服するわ。

「それじゃあ私に続いて発生してくださいね」
「ラジャー」
　結局皆に見守られながら発声練習をすることのなってしまった。
「口を思いっきり開けて、あー」
「あー」
「うーん……」
「ダメでしたか桜坂先生？」
「先生……？　そうですね、お腹から声を出してみてください」
「腹から？」
　腹から声を出すってどういうことだ？　声は喉からだろ？　あなたの声はどこから？　私は喉から。桜坂は腹から？　桜坂の腹には口があるのか？　デス〇（ピー）サロじゃん。
「わかりませんか？」
「全くわからん。桜坂がデス〇サロってこと以外何もわからない」
「えっ？　です……えっ？」
「どうやったらしずくさんがデス〇サロという結論に至るんですか……」
「腹から声を出せるなら腹に口がついてるに決まってるだろ？　そんなのデス〇サロ以外ないじゃん」
「違います。前提から全て違います。真面目にやってください」
　真面目にやってるんだけどなぁ……。
「本当にわかりませんか？」
「わかりません」

「わかりました。では、お腹から声を出すやり方から教えますね」
そう言うと桜坂は俺の方に歩いてきて……
「失礼します」
俺のへその下辺りを手で押さえてきた。
「ん!?」
待って、この子いきなり何してるの？　ギリギリあれには触れてないけども、桜坂が足を滑らしたりしたらあれに触れちゃうよ？　マジでヤバいよ？　俺の愚息がこんにちはしちゃうよ？
「大きく息を吸って」
「すぅー」
「息を吐きながら、あー」
「あー」
「息を吐く時はもっとゆっくり。ではもう一回。大きく息を吸って」
「すぅー」
「息を吐きながら」
「あーーー」
「いい感じです。ここもちゃんと固くなってますし」
「どこが!?」
もしかして愚息がこんにちはしちゃってますか？　ごめんなさい訴えないでください。俺は悪くないんです。悪いのは愚息なんです。
「丹田です」
「丹田？」
「おへその下、今私が触っているところが丹田です。お腹から声が出ている時はここに力が入っている状態です」
「あぁ、よかった……」
「よかった？　何がですか？」
「こっちの話。桜坂は気にしないで。ほんとに何でもないから」
愚息がこんにちはしてなくて本当によかった。桜坂がうっかり足を滑らしたりしちゃってたら確実にこんにちはしてたな。
「ちなみに、腹から声出すと何か良いことがあるのか？」
「大きな声が楽に出せますし、喉を傷めなくなります」

「ほーん」
「それ以外にもいっぱい良いことがありますけど、とにかくこれを身につけると声での表現の幅が広がるんですよ」
「なるほどなぁ。演劇でもスクールアイドルでも大事な技術なんだな」
「その通りです。とっても大切な技術なんです。だから一度でいいから友紀先輩にやってみてほしかったんです」
「そうだったのか……。なんか、ごめんな。最初やるのを嫌がったりして」
「気にしてませんよ。先輩はちゃんとやってくれましたし、私は嬉しいですよ」
　桜坂がええ子すぎる。死ぬほど可愛い後輩を通り過ぎて、死ぬほど可愛い異性として余裕で見れちゃう。普通に惚れちゃいそう。演技でも桜坂に好きとか言われたら余裕で堕ちるな。で、桜坂に告白して嫌な顔されて、『私はそういう意味で言ったわけじゃなかった』と振られるパターンだ。悲しいなぁ。そんなことされたら心ぶっ壊れて、二度と修復できなさそう。
「あと、私のことは桜坂じゃなくてしずくでいいですよ。これからは同好会の仲間なんですから」
「そうか。じゃあ……しずく？」
「はい。何ですか、友紀先輩？」
「いや、呼んでみただけだ」
「ふふっ、そうですか」
「何なんですか、今のやり取り」
「友紀君、しずくちゃんとも仲良いんだね」
「今のは仲が良いとかじゃなくて、付き合いたてのカップルがやる会話ですよ……」
「カップル……友紀君と……」
　しずくとカップルか……もしそうだったら毎日が幸せだろうな。でもある日突然『演技の練習のために付き合っていた』と告げられ、そのまま振られて心がぶっ壊れるんだろうな。そして将来しずくが女

優として恋愛ドラマとかに出てるのを見てさらに心が抉れるんだろうな。悲しいなぁ。
　あとさっき歩夢は何をボソッと小声で言ったの？　聞こえなかったからできればもう一回言ってほしいんですけど。あっでも俺の心を抉る内容なら言わなくても大丈夫です。むしろ言わないでくれ。
「あっ、私のことも侑でいいよ。私も友紀君って呼ぶから」
「わかった」
「……私のことは呼ばないんだね……」
「呼んだ方がよかった？」
「うん、呼んでほしいな」
「じゃあ、侑」
「なぁに、友紀君？」
「髪に糸くず付いてるよ」
「え、うそぉ！」

「次はここだね」
「ここは柔軟をやるところか」
　天王寺と近江先輩、それから朝香先輩が柔軟をやっていた。朝香先輩は補助的なことをやってたけど。というか、近江先輩体硬すぎない？　ほとんど動いてないんだけど。まぁ俺もあんまり人のこと言えないけど。
「そうだよ。あと体幹トレーニングとかもここでやるよ」
「へー」
　体幹トレーニングかー。やったことないけど、あれしんどそうなイメージがあるんだよな。
「あ、友紀さん」
「よっ」
「友紀君だ～」
「どうも」
「エマ達の所にはもう行ったの？」

「ええ。腹から声を出す方法を教えてもらいましたよ。今なら腹話術だってできます」
　できないけど。
「腹話術できるんですか!?」
「ごめんなさい嘘です。できないです」
「やっぱり嘘なのね」
「そうだろうとは思ってたけどね～」
　近江先輩にはバレてたようだ。まぁこの人とはそこそこ付き合い長いからなぁ。
「友紀さんも柔軟やってみる？」
「やる」
「わかった。私が補助する」
　天王寺に場所を変わってもらい、天王寺に背中を押してもらう。
「うぅー」
「友紀君も体硬いんだね」
「待ってグキッってなった今！　ストップ！　天王寺ストップ！」
「わかった」
　天王寺に手を離してもらって一息つく。体壊れるかと思った。
「ふぅ」
「今の璃奈ちゃんと同じくらいだったわね」
「毎日やってたらもっと柔らかくなるんですかね？」
「なるわよ。ちゃんと続けていればね」
「璃奈ちゃんも最初はすっごく硬かったもんね～」
「そうなのか？」
「うん。今よりもできなかった」
「そうか。頑張ってるんだな」
「うん。毎日頑張ってる」
　えらいぞ、と頭を撫でてあげたい。絶対に嫌がられるからやらないけど。
「それじゃあもう1回やるわよ」
「え」

「璃奈ちゃん」
「うん」
　天王寺の返事と同時にまた背中を押される。
「待って！　体壊れる！　マジで壊れるから！」
「大丈夫、加減はするから」
「ちゃんと加減してくれよ!?」
「任せて」
　加減するとは言うものの、天王寺はさらに背中を押した。
「えいっ」
「ぬわーーっっ!!」
「「「ぬわ？」」」
「友紀さんが燃やされた」
「なんで悲鳴がそれなんですか……」

「酷い目に遭った……」
　柔軟の後、腕立て伏せや体幹トレーニングとかでも朝香先輩にいじめられた。あの先輩怖い。でもその後『思ってたよりも根性あるのね』と朝香先輩が褒めてくれた。嬉しい。怖い先輩とか言ってごめんなさい。
「友紀さんはずっと『ぬわーーっっ!!』って叫んでただけじゃないですか。何回燃やされれば気が済むんですか。そもそも友紀さんは燃やされてませんけど」
「だって痛かったんだもん」
「私からは余裕そうに見えましたけど……」
「なんだ？　パ〇スにまだ余裕があったとで言うつもりか？」
「パ〇スさんの話はしてません！　友紀さんの話をしてるんです！」
「なんだぁ……。それならそうと最初っから言えよ」
「普通に考えてそうに決まってるじゃないですか……。誰がパ〇スさんについて話すんですか……」
「パ〇スを愚弄するのか？」

「してません！　このタイミングで話さないという意味です！」
「それならそうと最初っから言えよ」
「もう！　ツッコミが追いつきません!!」
　よし！　せつ菜に勝った！
　まぁ、実際せつ菜の言う通り全く余裕なかったけどね。普通にしんどかったです。明日は全身筋肉痛確定だなこりゃ。
「はぁ……疲れました……」
「大丈夫か？　ちょっと休む？」
「誰のせいだと思ってるんですかぁ……！」
「あはは……」
　さっき説教された仕返しが成功してすごくいい気分だ。
「その話は一旦終わりにして、最後はここだよ」
「ここは……何？」
　扉に何も書かれてないし、普通にわからん。
「ここはレコーディング室だよ」
「レコーディング室……」
　高校に普通レコーディング室なんてあるか？
「しかもカラオケもあるよ」
「カラオケまであるのかよ」
　カラオケのある学校なんて普通ないぞ。マジでこの学校どうなってるんだ。設備充実しすぎだろ。生徒としては助かるけども。
「お待たせー」
　俺がこの学校の異常さについて考えていると、侑達が先にレコーディング室に入っていくのが見えたので、慌てて俺も中に入る。中では宮下が歌を歌っていた。曲名はわからないけど、どこかで聞いたことがある歌だ。というかマジでカラオケあるんだな……。
「あ、ゆうゆ！」
「ごめん、邪魔しちゃったかな？」
「ううん、ちょうど終わったとこだから大丈夫だよ。それよりも来るの遅かったね。何かあった？」
「ちょっとね。友紀君に練習を全部体験してもらってたら遅くな

ちゃった」
「そうなんだ」
　待たせてごめんね。
「どうだった？　練習楽しかった？」
「うーん、半々かな」
「半々かぁ」
「発声練習なんかは楽しかったな」
　しずくのおさわりタイム（意味深）もあったし。
「でもランニングとか柔軟とかはあんまり楽しくなかったな。ランニングは体力使い切ったし、柔軟は痛いし、体幹トレーニングはしんどいし」
「そっか。でもそれは最初だけだよ。ランニングは体力がついてくると風が気持ちよくなるし、柔軟はできるようになってくると楽しくなってくるし、体幹トレーニングも続けられるようになると楽しくなるよ！」
「そういうもんなのか？」
「そうだよ！　だってアタシがそうだもん！」
　本当にそうなのかなぁ。まぁ人によって感じ方も違うし、宮下は多分何事も楽しめるタイプなんだろう。
「毎日続ければ友紀も楽しくなってくるよ」
「毎日か……」
「大丈夫ですよ。ランニングは毎日私が付き合ってあげますから」
「えっ？　俺も毎日走るの？」
「もちろんです。友紀さんにはもっと体力が必要だと思いますから」
「俺同好会の手伝いで来てるはずなんだけど……」
「ええ。ですがお手伝いにも体力は必要だと思いますよ？」
「それはそうだけど……」
「私が一緒に走ってあげますから」
「それが嫌なんだよなぁ」
「な、なんでなんですか!?」
「だってせつ菜と一緒に走ると倍疲れるし」

「そんなの気のせいです！　誰と走っても変わりません！」
「てめぇさっきのランニング思い出せや。ずっと俺の手を掴んだまま走りやがって。そのままお前の速度で走るから死ぬほど疲れるんだよ」
「それは、その……テンションが上がってしまって……」
　テンションが上がったからって俺を引きずり回さないでください。
「それじゃあ私が一緒に走ってあげるね」
「歩夢か。歩夢なら安心できそうだ」
　歩夢ならテンションが上がっても俺を引きずり回したりしないだろ。今日のランニングではせつ菜の暴走を止めてくれなかったけど……まぁ大丈夫だろ。
「むぅ……」
「何むくれてるんだよ」
「歩夢さんとは一緒に走るんですね。私とは走ってくれないのに……」
　せつ菜が頬をぷっくらと膨らませて怒ってますアピールをしていた。可愛いと思ってしまったのが何故か悔しかったので、指先で膨らんだ頬を押し潰す。口から空気が漏れ出た。おもしろーい。
「私で遊ばないでください……」
「機嫌直せよ」
「一緒に走ってくれるなら直してあげます」
「はぁ……わかったよ。走ってやるよ」
「ほんとですかっ!?」
「ただし、俺の手を掴んだまま走らないこと。これが条件。命に関わるからな」
「わかりました!!」
　この子もう機嫌直してるよ。鼻歌まで歌ってるし、完全に上機嫌だ。この子チョロすぎない？　本当に同い年か？
「あははっ！　２人とも仲良すぎ！」
「はい！　とっても仲良しです！」
「だから……はぁ、もう仲良しでもいいよ」

毎回否定するのめんどくさくなってきたし、否定したらしたでせっ菜に手握り潰されるし。
「……はぁ」
「ん？」
今視界の端の方で歩夢がため息をつくのがチラッと見えた。
「どうかしたか？　ため息なんかついて」
「えっ!?　な、何でもないよ！　何でもないから……」
「ならいいんだけど……」
悲しそうな表情が気になるけど、本人が何でもないっていうならそうなんだろう。
「そ、それよりも！　友紀君に私達の歌聞いてほしいな」
「俺も歩夢の歌聞いてみたい」
「うん。何かリクエストとかあるかな？」
リクエストか……。アニソンとかしか知らないからリクエストできる曲がないんだよな。……そうだ。
「演歌とかリクエストしてもええんか？」
「「……えっ？」」
うーん……。２３点くらいかな。
「あはははっ！」
なんか侑が大爆笑してるんですけど。そんな面白いダジャレだったか？　歩夢とせっ菜なんてドン引きしてるのに……。
「いいね！　今のダジャレサイコー！」
「えぇ……」
宮下もいいねじゃないんだよ。何も最高ではないんだよなぁ。
「その、愛さんはダジャレが大好きでして……」
「なるほどね……」
ダジャレ好きってこの世に実在したんだな。初めて見たわ。
「いひひひっ！　あーもうダメ！　お腹痛い……！」
「で、侑はいつまで笑ってるんだよ」
「侑ちゃん、幼稚園の頃からずっと笑いのレベルが赤ちゃんだから……」

「えぇ……」
赤ちゃんはダジャレでは笑わないと思うんですけど。
やっと侑の笑いが収まった。侑が落ち着くまで5分かかりました
(校長先生風)
「その、私演歌は歌えないんだけど……」
「あれが言いたかっただけだから、歩夢の得意な曲でいいよ」
「じゃあ……これにしようかな」
歩夢が選んだ曲が流れる。知らないイントロだ。

「ふぅ……。友紀君、どうだったかな?」
「よかったと思うよ」
「もっと具体的に言ってあげないとダメだよ」
「そうですよ。感想が『よかったと思う』だけなのはあまりにも酷いと思います」
「うーん……」
具体的にって言われても、俺の貧相なボキャブラリーじゃあな……。できる限りのことはやるけども。
「そうだな……歌声が透き通っていて、可愛らしい声だった。あと歌ってる時の表情が可愛かった」
「えへへ、ありがとう」
歩夢が喜んでくれたようでよかった。
「やればできるじゃん」
「任せとけ」
「じゃあ次はアタシが歌おうかな。曲はこれ!」
次は宮下が歌うみたいだけど、またしても知らない曲だ。俺が世間離れしてるのか?
「どうだった?」
「元気が溢れててよかったと思うよ。歌ってる時の宮下がすごく楽しそうで、こっちも楽しめた」

「そっか、それはよかった！　あと、アタシのことは愛でいいよ！」
「了解、じゃあ愛で」
「うん！」
「最後は私が歌いますね。曲はどうしましょう……」
　最後はせつ菜みたいだ。何を歌ってくれるのだろうか。
「友紀さんも知っていそうなこの曲にしましょう！」
「お、この曲は」
「やっぱり知ってますか。さすが友紀さん」
　なんかのアニメのエンディングだった気がするけど、アニメのタイトルも曲名も何も思い出せねぇ……。

「ふぅ」
　最後まで聞いたけどやっぱり何も思い出せなかった。何だっけな……。もうここまで出かかってるのに……。
「どうでしたか？」
「……ああ。力強い歌声でかっこよかったと思うよ」
「そうですか、ありがとうございます」
　思い出すことに必死になってたから適当な感想しか出せなかったけど、今ので満足してくれたんだ……。

　皆の歌を聞いたり歌わされたりしながら過ごして、そろそろ部活終了時間が近づいてきた。
「今日の練習はどうだった？　楽しかった？」
「思ってたよりは楽しかったな」
「そっか、それはよかった。明日も頑張ろうね」
　明日、か。明日も走らされるんだよなぁ。絶対筋肉痛なのに。生き残れるのかなぁ……。
「そんなに心配しなくても大丈夫だよ。辛そうだったら止めてあげるから」
「辛そうじゃなくても止めてほしいんですけど」

「それは無理かなぁ」
　そんなぁ……。
「そもそも俺手伝いで呼ばれてるはずなんだけど」
「それはそうなんだけど、正直に言うと今はあんまり手伝ってほしいことないんだよね」
「ないの？」
「うん。ライブを開くってなったらお手伝いが必要になるけど、今はそんな予定ないし」
「ふーん」
「だから、今のうちにしっかりと鍛えておいてね」
「え」
「力仕事とかもやってほしいから」
「頑張ります……」
「うん、頑張ってね」

＊　＊　＊

初めての練習から数日が経った。
あれから毎日せつ菜と歩夢に走らされ、柔軟とかでもいじめられて、1年生ズの愛嬌に癒される日々が続いた。なんで1年生ズはあんなに可愛いんだろうな。かすみんなんて愛嬌の塊だし。まぁ、柔軟で俺をいじめてくるのも1年生ズなんだけど。あの子達躊躇なしに背中押してくるからな。
今日は同好会に入って初めての週末だが、当然今日もいじめられた。練習時間が放課後より長いのでいつもよりも長く。今から一大イベントがあるというのに……。
「ここが友紀君の家かー。大きいね。ここで1人暮らししてるんでしょ？」
「そうだよ」

今日は侑が俺んちにゲームをしに来る日だ。自宅に異性の友達を呼ぶのは初めてだ。死ぬほど緊張する……。侑だから別に変なことは起きないだろうけど。

「どんなゲームがあるのか楽しみです！」

「友紀君1人暮らししてるの？　寂しくなったりしない？」

何故かせつ菜と歩夢も増えました。なんで??

第１０話

「「お邪魔します」」
「いらっしゃい」
　我が家に来るのは侑だけのはずだったのに、歩夢とせつ菜も来ることになりました。なんで??? ここ男の家だよ？　侑もだけど、俺に襲われたりとか考えないの？　３人とも可愛くてスタイルもいいんだから、もうちょいそういうこと警戒しないと。まぁ俺が襲ったところで力負けするし、そもそも襲う気なんてないけど。
「正面のあの部屋がゲーム部屋だから、先に行っといて」
「友紀君はどうするの？」
「飲み物とお菓子取ってくる」
「手伝おうか？」
「いや、手伝わなく大丈夫。ゲーム機の起動の仕方とかわかるなら、好きなゲーム選んで　やってていいから」
「わかりました！」
　なんかせつ菜すっごく楽しそうだな。おめめがキラキラしてらっしゃる。さてはおめぇゲーム好きだな？　デス○サロとかパ○スとかも通じたしな。生徒会長の面影さんどこ……？
　飲み物はリンゴジュースでいいかな？　紙コップは……あれ？　紙コップってどこに置いたっけ？　この棚に入れたはずだけど……あ、違ったわ。もう1個隣の棚だったわ。
　お菓子は……まぁじゃがいもチップスでいいかな。美味しいし食べやすいし。嫌いな人間はいないだろ。きのことたけのこもあるけどどうしようか。戦争の原因になるしなぁ……。……持ってちゃうか！　戦争、起こしちゃうか！　ちなみに俺はきのこ派です。
「おーい、誰か開けてくれー」
　両手が塞がっていてドアを開けられなかったため、部屋の外から開けてくれるよう頼む。横開きのドアなら足で開けられるんだが、さすがにドアノブまでは足上がらないしなぁ。
「今開けるね」

「ありがとう歩夢」
「どういたしまして」
歩夢が笑顔で開けてくれた。
歩夢の後ろでは侑とせつ菜が某有名なレースゲームで白熱していた。持ち運びができて、しかもテレビにも繋がる最新ゲーム機で発売されたばかりの新作だ。俺もかなりやりこんで、ネット対戦でもそこそこのレートまで上げた。そういえば、別の気になるゲームが発売されてから全然やってなかったなぁ。
「はい、これジュースとお菓子。好きに飲み食いしてくれ」
「ありがとう。わぁ、じゃがいもチップスだ」
「好きなのか？」
「うん、美味しいから大好き」
「それはよかった。好きなだけ食べてくれ」
「ありがとう。友紀君も一緒に食べよ？」
歩夢もじゃがいもチップスが好きみたい。やっぱり美味しいからね。塩加減が最高だし。
歩夢が袋を開けてくれたのでそれをつまみ、リンゴジュースを飲む。あぁーうめぇー。ところで、この袋の開き方なんて言うんだっけ？　大人数で食べる時の開き方。パーティー開き？　そんな感じの名前だった気がする。
「歩夢はゲームやらなかったのか？」
「コントローラーが２つしかなくて……それでじゃんけんしたんだけど負けちゃった」
「ああ、そうか。コントローラーないんだったな。すまんな」
「ううん、大丈夫だよ。負けた人の交代でやろうねってことになったから」
「まぁ普通そうなるよな」
侑とせつ菜の勝負は現状せつなが１位で侑が９位だ。侑はカーブが苦手みたいで、さっきから時々曲がるのに失敗している。あと侑はアイテム運も悪いな。攻撃アイテムも必中じゃない方しか出てないし、加速アイテムも出てきていない。まぁアイテム運が悪いキャラを

使ってるからなんだけど。
「これはせつ菜の勝ちで決まりかな？」
　ラスト1周で侑がここからせつ菜をまくるのはかなり厳しそうだ。せつ菜がミスをしないとまず無理だろう。だがせつ菜はさっきからミスを1つもしていないし、ここから先もせつ菜のミスは望めないだろう。
「あー負けちゃったー」
　予想通りせつ菜の勝ちだ。やっぱりせつ菜はミスをしなかった。ゲーム好きだろうし多分上手いだろうなとは思っていたけど、正直予想以上だ。ここまで上手いとは思ってなかった。
　あと侑は選んだキャラが悪かったな。侑が使っていたのはスピードもコーナリングもアイテム運も全て殴り捨てて重量に特化した超絶扱いにくいキャラだ。俺も全く使いこなせない。というかネット対戦でもこのキャラをおふざけ以外で使っている人を見たことがない。まぁ扱いにくいとかそんな次元じゃないからな。スピードは出ないし、曲がりにくいし、アイテムを使った加速もなかなかできないし。できることといえば体当たりで相手を吹き飛ばすことくらいだ。それはそれで楽しいけど。
　それに対してせつ菜は重量を犠牲にスピードに振った速度特化型の軽量キャラを使用していた。このキャラはスピードが出る分カーブが非常に難しい。俺も時々失敗する。せつ菜のノーミスはほんとすげぇよ。
「侑さんも初めてとしては上手でしたよ」
「へぇ。侑は初めてだったのか」
「うん、そうだよ。自分では結構上手くできた気がしてたけど、さすがに経験者のせつ菜ちゃんには勝てなかったよ」
「侑もそれなりに上手く立ち回れてたけど、せつ菜が純粋に上手かったな」
「せつ菜ちゃんミスなしだったもんね」
「えへへっ、ありがとうございます！」
「負けちゃったから私の交代だね。次は歩夢？　友紀君？」

「歩夢が先でいいよ」
「いいの？　ありがとう。じゃあ私がやるね」
　歩夢と侑が場所を交代して、侑が俺の隣に座る。
「そこのジュースとお菓子は自由に飲み食いしていいからな」
「うん、ありがとうね。このじゃがいもチップス何味？」
「うすしお」
「やった、一番好きな味なんだー」
　侑は美味しそうに食べる。
「ん～おいひ～」
「うすしお味はこの塩が最高なんだよな」
「わかる！　この塩自体もすごく美味しいけど、やっぱりこの絶妙な塩加減が最高だよね！」
　やっぱりじゃがいもチップスのうすしお味は万人が認める美味しさなんだな。これ以外の味も美味しいし、じゃがいもチップスという最高の商品を生み出した企業に感謝を送りたい。
「ぷはぁ～！」
　おっさんかよ。しかも酒じゃなくてリンゴジュースだし。でも何故か様になるな。
「友紀君から見て２人の勝負はどう？」
「そうだな……」
　今は歩夢が１位でせつ菜が３位。
　歩夢はスピード、コーナリング、アイテム運、重量全てがバランスよく割り振られたバランス型のキャラを使用していた。このキャラは普通の人が使うとただの安定感抜群キャラになるが、上手い人が使うと本当に強い。加速アイテムやお邪魔アイテムを最高のタイミングで使われるとマジで勝てない。歩夢がどれだけ上手いかはわからないが、なんとなくバランス型って歩夢に似合う気がするなぁ。
　ちなみに、せつ菜が使っているキャラはさっきと同じだ。こちらもせつ菜にスピード特化ってのも似合ってる気がする。
「ほうほう、これはこれは……」
「どうしたの？　何かあった？」

「歩夢がアイテムを上手く使ってせつ菜の妨害をしてるな」
「そうなの？」
「今歩夢がお邪魔アイテムを置いたろ？　実は歩夢が通ってる道がショートカになってるんだ」
「ショートカ？」
「ああ、ごめん。ショートカットの略」
「へー、そうなんだ。ということは、歩夢はせつ菜ちゃんがショートカットを通れないようにしたってこと？」
「その通り。ここは道が狭いからショトカを通ろうとするとどうしてもお邪魔アイテムを踏んじゃうんだ。で、今見た通りここのショトカは入ってすぐの所にジャンプ台があって、お邪魔アイテムを踏んでスリップするとジャンプに失敗して崖に落ちるんだ」
「ほぇー。だからせつ菜ちゃんはあの道を避けたんだね」
「そゆこと」
「適当に置いてるように見えたけど、いろいろ考えながらやってるんだね。同じアイテムでも私なんて適当に置いちゃってたよー」
「まぁ初めてなんてそんなもんだ。さっきみたいのなんて道を覚えてないとできないし」
　というか歩夢の使い方が上手すぎるんだよなぁ。確実に初プレイではないな。人畜無害な見た目だけど、実は何人も崖に落としてそう。
「あれ？　俺のコップどこいった？」
「コップなくすなんてことある？」
　おかしいなぁ。自分の左側に置いといたんだけどなぁ。
「どこに置いてたの？」
「ここ」
「え……」
「え？」
　何その反応。
「侑が今使ってるコップ、まさかとは思うけどここに置いてあったやつじゃないよな？」

「……」
「おい、こっち見ろよ」
「……」
「使ったんだな？」
「うぅ……友紀君が私用に入れてくれたやつだと思ったんだもん……」
　違うよ。ちゃんと数数えてよ。1個しかなかったじゃん。
「ごめん……」
「別に俺はいいんだけどさ……これって間接キスじゃね？」
「い、言わないでよ！　考えないようにしてたのに！」
　侑にポカポカ殴られるけど、これって俺が悪いのか？　俺別に悪くなくない？　……悪くなくない？
「友紀君のコップを使っちゃったのは私のミスだけど、わざわざか、間接キスなんて言わなくてもいいじゃん……」
「だって事実だし」
「それはそうだけどさぁ……もうちょっと、こう……配慮というか……」
「配慮と言われても……嫌だったなら口元洗ってきてもいいぞ。洗面所はここ出てすぐ左にあるから。嫌だったらというより確実に嫌だっただろうけど」
「待って待って。別に嫌ではなかったよ。友紀君のことは結構好きだし」
　ちょい。ちょいちょいちょい。ちょい待って。今なんかすごいこと言わなかった？　俺の聞き間違いじゃなかったら滅茶苦茶すごいこと言ってた気がするんだけど。今俺のこと好きとか言ってなかった？
「あっ、今の好きは友達としての好きだからね！　異性として好きになるにはまだちょっと早いかなって……」
　まだちょっと早いってどういうこと？　もうちょっと一緒にいたら好きになってくれるってことですか？　そんな言い方されたら俺も侑のこと好きになっちゃうよ？　いいの？

「と、とにかく！　嫌ではなかったから！　嫌ではなかったけど……ただ、もうちょっと言い方を考えてほしかったかなって……」
「言い方……わかった、次からは気を付ける。次からは間接キスじゃなくて間接キッスって言うことにするわ」
「違うよ、そうじゃなくてね？　間接キスしちゃったってなっても言わないようにしてほしいってこと。言われたらどうしても意識しちゃうから」
「わかったよ、次もし侑と間接キスすることになっても、侑に間接キスって言わないようにするよ。ごめんな、間接キスって言って」
「もう！　今の完全にわざとでしょ！　私のことからかってるでしょ！」
　バレちった。さっきから侑の反応が可愛くてついついやってしまった。俺が間接キスって言うたびに顔を赤くするのが可愛くてね。
「あぁ負けちゃったぁ……」
　俺が侑で遊……じゃなかった。侑とじゃれ合っている間に歩夢とせつ菜の勝負が終わっていた。最初歩夢がリードしてたのに、最後せつ菜にまくられたんだな。
「歩夢さん、最後の方でたくさんミスしてましたね。何かあったんですか？」
「えぇっと……ちょっと気が緩んじゃって……」
「あー、そういうことありますよね。勝ったと思って気を抜いちゃって失敗すること。私も何度も経験があります」
　わかるわかる。俺も何度も経験したよ。ボスと戦ってる時にこれは勝ったなと思って回復せず攻撃したらミスしまくって全体攻撃でやられたり、レースで終盤で1位の時にカーブを失敗したり、数学で最後の最後の式変形で四則演算を間違えたり。何なんだろうね、この現象。名前つけたいな。何かいい名前ないかな？　ないよなぁ。ネーミングセンスが欲しいぜ……。
「それじゃあ私と友紀君が交代だね。はい、友紀君」
「さんくす」
　コントローラーを受け取り、さっきまで歩夢が座っていた場所に移

動する。
「友紀さん、勝負ですよ！」
「負けて泣くなよ」
「泣きませんよ!?　それに負けません！」
　キャラはどうしようかな。せつ菜が軽量のスピード特化だし、こっちは中くらいの重量のスピード・コーナリング型を使おうかな。単純なスピード特化対決だと面白くないしな。重量特化キャラ？　誰が使うかよ。
「ステージはどうしますか？」
「せつ菜が選んでいいよ。お前が得意な所でもいいし」
「ほう？　さては友紀さん、私のこと舐めてますね？」
「そんなことないよ。せつ菜は普通に上手いと思うし。ただ、それでも俺が勝つっていうだけ」
「……ふふふ、いいでしょう。では遠慮なく私が得意なステージを選ばせてもらいます。私の実力をとくとお見せしましょう！　私に負けても泣かないでくださいね！」
　せつ菜が選んだステージは直線が多めのステージだ。直線では減速の必要がないためスピード特化が活かしやすいステージになっている。これはコーナリングで差をつけるしかないか。
「いいぞー、やっちゃえせつ菜ちゃん！」
　侑はせつ菜の味方か。さてはさっきからかったこと根に持ってるな？
　画面がステージに切り替わり、もうそろそろカウントダウンが始まるので、スタートダッシュに備える。隣のせつ菜をチラッと見ると、こちらは一切気にせず、真剣な顔で集中していた。なんか、真剣な表情のせつ菜って滅茶苦茶可愛いな……。普段せつ菜はどちらかというと子供っぽくて、いつも笑顔で、生徒会長モード以外で真剣な表情のせつ菜を見たことがなかったから、そのギャップでやられてしまった。……いかんいかん。集中しないと。スタートダッシュに失敗したら絶対に負ける。
「さすが友紀さん、完璧なスタートダッシュですね」

「君のせいで失敗しかけたけどね……」
「何か言いましたか？」
「いや、なんでも……」
　せつ菜もスタートダッシュを決めたので、スタート直後の直線で少しずつ離される。スピード・コーナリング型といえど、スピード特化には直線では勝てない。でもそれは想定の範囲内。勝負はカーブ。さっきから見ててもせつ菜はカーブが大回りになりがちだ。このステージの最初のカーブは距離が長いため、せつ菜の大回りが弱点になる。しかもせつ菜のキャラは減速しないと曲がりにくいしね。それに対して、こっちのキャラは速度をある程度維持したまま曲がることができる。それを利用してせつ菜よりも先にコーナーを抜けて、せつ菜が抜けてきたタイミングで体当たりして吹き飛ばす。これでいこう。
　作戦を練り上げていざコーナーだ、というタイミングで俺の左肩に何かが触れた。なんやねん、こっちは集中してんやぞ、と若干キレつつ見ると、せつ菜の頭が左肩に触れていた。こいつ、カーブに合わせて体も動くタイプかよ……。
「やべ」
　せつ菜に意識を取られてカーブをミスってしまった。
「私を舐めるからです！」
　違うんだよ。俺は悪くないんだよ。せつ菜がカーブに合わせて体を動かすのが悪いんだよ。右に移動しようとしても中身の入ったコップを横に置いたせいで移動できない。コップは新しいのを用意しましたよ？
「私の勝ちです！」
　あの場から移動することもできず、右カーブのたびにせつ菜の頭が当たるため集中できず、ミスを連発してしまった。しかもそのたびに後ろから物凄い視線を後ろから感じるし。おのれ優木せつ菜……！
「せつ菜ちゃんの全勝だね」
「ありがとうございます！」

「あれ～？　あんなに余裕みたいな雰囲気出してたのにせつ菜ちゃんに負けちゃったの～？」
「うるせいやい」
　侑に頬をツンツンされて煽られる。やっぱり根に持ってるな。
「しゃあない。優勝賞品として、せつ菜にはこのきのこのお菓子をあげよう」
「あっ、私たけのこ派なのでそっちにしてください」
「は？」
「え？」
　はぁー、こいつたけのこ派かよ。
「侑さんはどっち派ですか？」
「私もたけのこかな」
「……歩夢は？」
「えっと、私もたけのこ、かな」
　俺以外全員たけのこかよ……。
「ほら、友紀さんもたけのこ派に改宗するんですよ」
　せつ菜がたけのこ両手にジリジリと近づいてくる。後ろに下がって逃げようとすると、左腕を侑に、右腕を歩夢に掴まれる。
「これは罰ゲームだよ」
「ごめんね友紀君……」
　いや、どんな罰ゲームだよ。罰ゲームで改宗させられてたまるか。あと歩夢は笑顔で謝るのはやめてください。せめて申し訳なさそうな顔してくれ。
「ふふふ……」
　せつ菜も怪しい笑みを浮かべながら近づいてくる。やめろ、近寄ってくるな……。
「えいっ！」
「むぐっ！」
　４個のたけのこを口に突っ込まれる。さっきまで２個しか持ってなくなかった？
「味はどうですか？」

「うーん……せつ菜の指の味……」
「違います！　私の指の話じゃありません！」
俺は意地でも改宗しないぞ。あと味の話をしたら右腕に痛みが走った。歩夢さん痛いです……。たけのこの味を誤魔化そうとしたからって俺の腕をいじめるのはやめてください……。